

---

# ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

ジンダイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

### 【Zコード】

Z9388Y

### 【作者名】

ジンダイ

### 【あらすじ】

舞台はカントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イッシュの五つの地方からなる世界。

そのひとつ、ホウエン地方の隅にある、ちょっと変わった風習のある小さな村。そこでも他の町と変わらず、今年も新人トレーナーが旅立とうとしていた。しかし、この村特有の最初のポケモンを決める儀式から、少年達は少しづつ、伝説のポケモンの戦いに巻き込まれてゆく。

この話は、人々から忘れられた戦いとそれを止めようとする人と

ポケモンの物語である。

「最初の方は主人公側、敵側共にほのぼのとしていますが、主人公がある程度成長すればシリアスになってくる予定です」

「作者は初心者です。文章的におかしい所があると思いますので、ご指摘してくだされば嬉しいです」

## プロローグ（前書き）

初投稿です。

## プロローグ

ここは上も下もない、時間も空間も安定しないこの世の裏側、反転世界。

そこにはいる2匹のポケモン。

体は白と紫で、首の後ろに管のようなものがあり、長い尾をもつてんしポケモンのミコウツーと、赤いトゲのついた黒い影のような翼をもち、ムカデのような姿をしているはんこつポケモンのギラティナだ。

ギラティナ「そろそろ…始まってしまうのか…」

ギラティナがため息を吐きながら囁く。

ミコウツー「戦いは、復讐は何もうみださない…憎しみ以外は…それは私が一番よく知っている」

ギラティナ「そうだな…だが皆はそれに気づいていない…ダークライが上手くやつてくれればいいが…」

と、そこへ2匹の後ろに黒い影が地面を這つてきた。

? ? ? 「帰つたぞ」

そして黒い影からポケモンが出てきた。青く鋭い目に、黒い衣のような体をしたポケモン、あんこくポケモンのダークライ。

ミコウツー「…どうだったか」

ダークライ「ショイミは戦いには反対だが、勝てる訳がないから隠れていると…クレセリアは勝てそうな方に味方すると言つていた

…これからラティオス、ラティアスの所に行くつもりだ

ギラティナ「すまんな…皆の説得を任せて…」

ダークライ「大丈夫だ、問題ない。オレの力なら素早く移動出来るしな。じゃあ、行つてくる」

そしてダークライは影の中に沈み、消えた。

ミコウツー「私もカントーの奴等を説得したほうが…」

ギラティナ「やめておけ、三鳥はルギアを尊敬している…彼奴等はルギア次第だ。それにオレはディアルガ達には会つ」とやらできそうにない…アルセウスの裏切り者だしな」

ミコウツー「…そうだな」

ミコウツーはそう言つて、そこいらじゅうに浮いているシャボン玉の様なものを見渡す。

ミコウツー「私は前回の戦いには参加していなかつた…もう戦いはまづんざりだつたからな」

ミコウツーは遠くの方に浮いているシャボンを見る。その中には、無人島が写っていた。今だにかたずけられないガレキがちらばつている。

ミコウツー「しかしもつ私がしたような悲劇は繰り返したくない…だからこの戦いを止める」

ギラティナ「オレも同じだ。前の戦いでオレのした事の償いとして、皆の暴挙を止める」

ミコウツー「そのためにも、今はダークライを信じよう」  
ギラティナ「ああ、それしかない。十分な数が戦いに反対してくれれば…皆もやめてくれるかもしれないからな…」

そして同じ頃、ある村で運命がついに決しました…

## プロローグ（後書き）

後書き

ふ~やつと終わつた~途中で意味分かんなくなつて3回ほど書き直  
ちやつたよ、本文。

さて、今日から書かせていただく、ジンダイです。文章力はほんと  
いですが、感想を書いてもらえれば嬉しいです。どうかよろしくお  
願いします。

6月3日 ポケモンが貰える日（前書き）

第1話 よう／＼＼＼＼＼＼＼＼やく始動……な 長かつた  
軽く3、4回ほどきえたよ 本文

ナオヤ「惨めだな、作者」

あ、脇役のナオヤ君

ナオヤー 準主人公と言つてほしいね！」

一  
緒  
じ  
や  
ん。

ナオヤ「ハア、脇役と準主人公の違いも分かんないような馬鹿な作者だと、俺達が苦労するぜ」

(カチン) それ、本気なのかな?ナオヤ君?

ナオヤ「本気に決まつてるじやないか」

フーン（ニヤリ） じや、本編スタート…！

ナオヤ「何言つてんだ？作者は？」

## 6月3日 ポケモンが貰える日

ホウエン地方、キナギタウンとカイナシティの間にある小さな島。朝、この島のひとつの民家で少年が眠っていた。

少年「ンン…」

お母さん「コウタ～朝よ～起きなさい～」

少年の母親がリビングから呼び掛けている。

「コウタ「ん…ん～もう朝か…眠む」

少年…「コウタは眠そうに田舎を」する。

お母さん「今日は6月の3日でしょ～いいの～」

「コウタ「なぬ…そうだったのか…? 僕としたことが…今いくぞ…!」

「コウタは跳ね起き、素早く着替えて走る。

この村では、10歳以上の人には今日…6月3日に最初のポケモンをもらい、旅立つことができるのだ。

「コウタ「リビングに到着…!」

リビングには、すでにパンと牛乳、味噌汁の朝食が用意されていた。

お母さん「早いわね～いつもとは大ちが…」

「コウタ「いただきます」」おもろまこつてきますダッガチャドガ

ツバタツ」

「ウタの朝食は一瞬で綺麗に食べ尽くされ、肝心のウタは玄関で誰かと激突し、伸びていた。

お母さん「ウタへ氣をつけて行つてらっしゃーい」

お母さんは玄関であつた事に気づいてないようだ。

「ウタ「痛つて…おい…ナオヤ…危ねえだろが…」…氣つけろよ！…」

ナオヤ「んなこと言われてもな、お前が急に飛び出してきたからだろが…！」

この少年はナオヤ。ウタの幼馴染みであり、親友だ。

? ? ? 「全く…一人とも慌てすぎよ」

ナオヤ「メイみたいな乱暴凶悪女には言われたくノグボホッ」

ナオヤは後ろにいた少女に殴られ、うずくまつた。

メイ「だれが乱暴凶悪女つて？」

この少女の名前はメイ。一人の唯一の女友達だ。といつより、この村では10歳前後の少女は1人しかいない。

メイ「それで、どうでもいいけど一人とも服が乱れ過ぎよ。儀式にはちゃんと正装でいかなきや」

そう言って、メイは綺麗に着こなした服をみせびらかす。

ナオヤ「ちつ、年下の癖に」

メイ「なんか言つた? (怒)」

ナオヤ「いえ何も (汗)」

ナオヤは昨年の6月後半、メイは一ヶ月前に10歳になつたので、  
「ウタとナオヤの方が年上なのだ。

「ウタ (メイつて将来、ずっと黙つてたら絶対モテるよな……)

メイの事を密かに可愛いと思つてゐる「ウタは、ナオヤがボロボ  
ロにそれでいるのを見ながらおもつた。

メイ「じゃつ、あそこのはろひ雑巾はほつといて祠に急ぎまじょ  
か」

もはや、ぼろ雑巾扱いされているナオヤ。

ナオヤ「…………グ…ガハ…」

もはや立てないほどまでボロボロになつてゐるナオヤだが、どう  
せいつもの事なので「ウタはほつておいた。

メイ「ねえ、「ウタ? 最初のポケモン誰にするの? 私はリリーラ  
とホエルゴがいいな」

ナオヤ「俺はアノップスとジーランスがいい!」

「ウタ (いつもながら復活早)

メイ「黙れ、社会のテスト\* 点が。 (点数はある人物の要請によ  
り削除)」

ナオヤ「ガハッ…ひ、人の古傷をつつくのはやめようか…その手

ストは頑張つて追試でとりかえしたし…」

しかし、ナオヤが弁解（言い訳）をしている間に一人は先に行つてしまつた。

ナオヤ「おい！まつてく「グボハツ」

二人は、ナオヤが何も無いところで転んだ事に気づくはずもなかつた。

6月3日 ポケモンが貰える日（後書き）

後書き

ナオヤ「オイ！作者！！」

ん~、何~

ナオヤ「何だよーあの俺のあつ~k~」

ネタキャラ

ナオヤ「返答早すぎだろ！！！？」

じゃあ、また今度。 ダツ！！

ナオヤ「あつ、逃げられた…」

## わあ、これ祠へー！（前書き）

ただ今、隣で伝書鳩リネロサーチスティが、ぼやきながらGENT'Sの続きを書いております。

「ウヤ「悲愴さんって名前のとおり悲しい人だね…」

作者に似たんでしょう、悲愴もナオヤもモデル同じだし。

「ウタ「え！？ そりなの！？！」

うん。あの社会のテストも実話だし。でも次のテストでなんと7点上がったという奇跡を起こした人もある。

ナオヤ「要するに、俺はすげんだな」

いや、71点上がったということは、その前は29点以下だったということだよ。（しかも上がっても普通レベルだったし）

ナオヤ、悲愴、伝書鳩リネロサーチスティ「うるせえ！！！」

ということで一行だけ、コラボしました。では、本編スタート！

わあ、これ祠へーー！

3人は最初のポケモンを貰うため、祠に急いでいた。

メイ「そういえば、コウタはポケモン誰にするの？」

「コウタ「うーん、気のあうポケモンなら誰でもいいかな…」

「コウヤ「曖昧だな。スクールのアンケートで「最初のポケモンは何がいいですか」っていうのがあったが、何て書いたんだ？」

「コウタ「気のあいそうなポケモンって書いた」

メイ「コウタつたら…」

一応、この村にもトレーナーズスクールがある。生徒は全部で10人ほどしか居ないが。

「コウタ「あつ、見えてきた」

「コウタが指差した所は海岸線で、そこには一人の男が立っていた。

ナオヤ「あ、兄貴！！？」

メイ「コウヤさん！？」

「コウタ「コウヤさんが祠まで連れて行つてくれるんですか？」

「この男はコウヤ。ナオヤの兄である。けつこうキャラくて軽い性格だ

「コウヤ「おうよーーいけーージーランスーーー！」

コウヤのモンスター・ボールから赤い光が飛び出し、中からポケモンが出てきた。

ジーランス「じら～」

ユウヤ「さ、みんなこれに掘まつてくれ」

祠は海底の方にあるためポケモンの技、ダイビングを使っていくのだ。

そして4人はジーランスに掘まつた。

ユウヤ「行くぜ！ ジーランス、ダイビング！ ！」  
ジーランス「じら～！」

ジーランスの周りに空気の膜ができ、3人を包みこんだ。

バシャン

4人はジーランスと共に、海底へとむかつた。

ナオヤ「ガボボボボボボボボボボボボボボボ！」

「ユウヤ（あれ？ そういえばジーランスって4人も連れてダイビングできたっけ…）

祠の入り口

ナオヤ「げほつ、げほつ、げほげほげほげほつ  
ユウヤ「悪いい、ジーランスは3人乗りだつたわ」

むせているナオヤに、ユウヤは全く全然ちつとも反省していない様子で謝る。

メイ「さつ、行くわよ」  
「ウタ「うん」  
ナオヤ「俺についてはノー・メントですか?」

そして4人は祠の奥に向かつてあるきだした。

わあ、これ祠へーー！（後書き）

後書き

短くてすみません。時間ないんで（汗）

## 伝統の儀式（前書き）

ナオヤ「1、2日に1回は投稿してるな、作者」

いやいや、どうせ2、3円はほとどり更新できないだらうからね。今の内にしどかなあ。

ナオヤ「受験か、まつ受かるよう頑張ることだな」

妹にガチで負けてる君には言われたくないよ。（ナオヤがめ ゼ  
ん…ブツ）

ナオヤ「リアルの事はいわんでいいいいいいいいいいいいいい  
いい！」

じゃ、上のバカはほつといて本編ゴー！！！

## 伝統の儀式

祠、最深部

そこにある巨大な石板の前に、40代ほどのチョビ鬚をはやして  
いの男性…村長がいた。

村長「よく来たな」コウタ、ナオヤ、メイ。案内」苦労だった、  
コウヤ。」

コウヤ「いじつて」とよ、村長」

メイ「こんにちはー叔父さん、今日はよろしくお願ひしますーー。  
ナオヤ（メイは村長の姪だもんな、めいだけ）

メイ「叔父さん、ちょっと待つてくださいね」

村長「嗚呼、いいが」

メイ「ナオヤ～ちよつ～といひち来てくれる？」（怒）

どうやら、ナオヤの心の底にはメイにお見通しだったようだ。

ナオヤ「ちよつとメイさん、髪の毛引つ張らなくていいよね？痛  
いんだけど」

メイ「じゃあ、その痛み消してあげるよ」（黒笑）

ナオヤ「くほはああああああああああああああああああああ  
ああああーーー。  
メイ「終わりました」

そして、皆ナオヤの事はスルーして話を始めた。

村長「では、儀式の内容はわかっているな？」

メイ、「コウタ「ハイ！！！」

ナオヤ「…………ハ……イ……」

まだナオヤは大丈夫なようだ。

村長「まず、儀式の内容を確認する。最初にホエルコ又はジーランスを選び、受けとる。その後、儀式を行いもう1匹のパートナーは、アノプスカリリーラかを決める。わかっているな？」

メイ、「コウタ「ハイ！」

ナオヤ「OK！！！」

「コウタ（復活早…）

この村では、最初のポケモンがキモリ、アチャモ、ミズゴロウのホウエン初心者用ポケモンではなく、世界の中で野性がここにしか生息していないアノプス又はリリーラ、この島から旅立つために必要な技、なみのりを覚えているホエルコ又はジーランスなのだ。この島の周りは激しい海流が流れているので、船がとおれず、ポケモンでいくしかため、ポケモンリーグはこの辺りの島から旅立つトレーナーのみ、ジムバッヂ〇個でもなみのりを使うのを認めている。

村長「やり方は、まず自分の旅の目標を書いた紙を祭壇の火に投げ入れる。そしてその紙が燃え尽きるまでの時間でパートナーを決める。これもいいな？ では、今から儀式を初める。まず誰から…」

ナオヤ「ハイハイハイ！！！俺から行きます！！！」

「コウタ「あつ、抜け駆け…」

メイ「まったく…」

ナオヤは早速、紙に旅の目標を書き炎の中に投げ入れる。

ナオヤ「行けえい！！」

それと同時に村長はストップウォッチで、炎の中の紙がどれくらい燃え尽きるのかを測る。

そして、1分位した後、紙は完全に燃え尽きた。

村長「え～と…今のタイムから…ナオヤ、君は、」

村長は何やら名簿の様なものをみていたが、口を開いた。

村長「アノapusだな」

七  
顔

たが、

メイ「キモイ」

ル・ル・ル・ル・ル・ル・ル・ル・ル・ル・ル

古漢集

うけなかつた様だ。

ナオヤ「...」  
（泣）

メイ「や、ショゲてるやつはめりとて私の番」

メイが張り切って儀式をしている間、コウタは壁の凹凸を触っていたコウヤに、気になっていたことを聞いた。

「コウタ「あの…コウヤさん」

「コウヤ「ん、何だ?」

コウヤは壁から手と田を離さずに答える。

「コウタ「ビーチの村には、こんな儀式があるんですか?」

「コウヤ「この儀式が発祥した訳か?」

「コウタ「はい。何か知っていますか?調べたけど何処にも書いてなくて」

コウヤは少しごつかりした様子だ。

「コウヤ「悪い、俺も知らない」

「コウタ「そうですか…」

「コウタは少し、がつかりした様子だ。

「コウヤ「そもそもこの儀式自体、あまり意味ないしな」

「ナオヤ「どうもつことだ?」

いつの間にか復活していたナオヤが聞く。

「コウヤ「実は最初のポケモンは、みんなもつ決まってんだ、スクールのアンケートで。」の儀式は形だけだよ」

「コウタ、ナオヤ「…………」

二人は絶句する。

「ウヤ「この事は、なるべく秘密にな」

「ナオヤ「…………なんで、こんなまわりくどい」とするんだ?」

「ウタ「伝統だからだろうね……」

その時、メイが儀式を終わらせて戻ってきた。

メイ「お~い、コウタ～ナオヤ～ 私はリリー～ラとホエルコにな

つたよ～」

「コウタ「う、うん。」

「ナオヤ「よ、よかつたな」

もうポケモンは決まっていたといふことを知つてしまつた二人は、複雑な気持ちでメイにこたえる。

メイ「?一人共どうかした?」

「コウタ、ナオヤ「いつ、いえ、何でもありません!――!」（汗）

メイ「そう?」

慌てていた二人をメイは疑わしそうに見ていたが、ポケモンをもらつたことで機嫌が良いらしくそれ以上何も聞かなかつた。

「コウタ「次は僕の番か…行つてくる…」

「ナオヤ「お、おう。」

「メイ「行つてらっしゃ～い。自分の好きなポケモンが貰えるといいね」

その言葉を聞いた二人は、また複雑な表情になる。

「コウタ」「う、うん…そ、そうだね」（汗）

ナオヤ「アハハハハハ…」（汗）

メイ「本当にどうしたの？」一人共？

「コウタ、ナオヤ」「いっ、いえ！…本当に何でもありますん…！」

（汗）

メイ「？」

キョトンとしているメイの横を走って通り過ぎ、コウタは村長の元へ向かった。

村長「では、今からコウタの儀式を初める」

「コウタ」「ハイ！…！」

「コウタは紙を受けとると、早速かきはじめた。

「コウタ（あれ？僕みたいに欲しいポケモンの名前をはっきり書いてない時はどうなるんだろう…）

「コウタは書きながらそういうことを考えていた。

「コウヤ（はっきり書いてない奴は、村長がどっちをやるのか決めらんだったな…コウタはどうちになるんだか）

そして準備が完全に済んだコウタは、紙を炎に投げ入れ、その紙は燃え出す……

はぎだつた。

紙は炎の中にはこぬも、すぐそこから真上に飛び出し、しづらへ空中をまつたあと、村長の後ろにある石板の上に乗つてしまつた。

村長「ま、まさか……」んな事が本当に…。

村長はかなり動搖している。

「カタ（あぢやへじへいたかな…）」「すみません、もう一度やつ直します」

「カタが石板に手を伸ばし、紙を取り戻したのだが……

村長「やめカタ……お前のパートナーはもう決まった!!」  
「！」

半分取り乱している村長の声により、中断させられた。

「カタ「どうぞお手に取れ」（アーフスからコーカビヒチだわ  
う…）

村長「…………お前のパートナーとなるポケモン達は……の中にいる」

なんとか落ち着きを取り戻した村長は石板を指差す。

「ウヤ」一体その石板の上に紙がのつたらどうなるんですか？村  
長

ナオヤ「この石板がポケモンなのか？」

兄弟で村長に問う。

村長「いや、正確にはこの祠の奥に封印されているポケモンだ…儀式の紙が石板の上にのったということは…まさか代々伝わる、儀式の元になつていてる話が現実になるなんてな…夢にも思わなかつたことだ」

「ウタ「一体なんの話を…」

村長「ウタよ、じちりに…今から石板の封印を解き、お前のポケモンと会わせる…お前は守護神に選ばれしものだ…」

運命の歯車は加速を始める…この少年達と守護神と呼ばれるポケモン達との出会い…そしてまた、別の出会いにより…  
運命はもう、止まらない。

## 伝統の儀式（後書き）

後書き

「ウタ「で、結局僕のポケモンは？」

それは秘密。

「ウタ「まあ、いいか。どうせ次わかるし…」

分かんないよ。

「ウタ「分かんないの！？」

だつて次回とその次の話では、君達の出番はないし。

「ウタ「じゃあ誰がでるんだよー？」

次回は新キャラが出る、とでもこいつおくれ。

「ウタ「次の次は？」

いや、流石にそれは言えないね。

「ウタ「…………どうしてもダメですか？」

うん、ダメ。

「ウタ「じゃあ僕にだけ」

じゅうがないな~ パンパンパン

パウタ「え? ー? あこひがー! !

そだよ。じゃあ今度はこの辺でやるから~

パウタ「唐突にねわったな……」

\* 7人のトレーナー \* (前書き)

よし、第5話完成つと。2日かけて5、6時間ほどかかったよ。

ナオヤ「短い割には時間がかり過ぎじゃね?」

DSのタッチパネルで書いてたらやたら遅いわ。

ナオヤ「はあ、DS…?…どうこうつた…?」

今までの小説は全て3DSやDSIのインターネットブラウザーで書いてました。画面閉じたら文章消えるわ、考えてたら急に接続切れるわでもう大変だよ……

ナオヤ「PC持つてないのか?」

持つてるのは持つてるけど親がインターネットに接続することを許してくれない!!!

ナオヤ「悲しいな、だからこつもあんなんに短かつたのか」

そうだよ、でも君のモデルである伝書鳩リネロサーブディからは本名と住所をえらさなければナオヤに何をしても、何を言つてもいいっていう許可なら出たよ。

ナオヤ「その許可是こらあああああああああああああああん…!…!」

さて、僕が一生懸命書いた第5話、スタート!…!

\* 7人のトレーナー \*

A  
M  
6  
:  
0  
0

ここは119番道路、野生のヒンバスが生息している場所だ。この道路の隅に立ててあるテントから、一人の男が出てきた。

? ? ? A  
—ふあゞ、ぬく寝たゞ

???: B - 担当者へ問い合わせます、ファイル先輩

すでに外にいた青年が挨拶をする。

ブイマル おはよ、ヒカル

この一人は、ブイマルとヒカルというようだ。

? ? ? こ 「 い い 朝 だ な 」

テントの裏に座っていた男が言つ。

「スマート」や「AI」など、おしゃれな言葉が並ぶ

この男は、ミストというらしい。結構無口な様だ。その時、

? ? ? D 「おっしゃう」 や こ ま す ! ! !  
? ? ? F 「 今日も一元気にして いき ま す ! ! !

テントから、異様にテンションが高い一人が出てくる。

ヒカル「マサヤ…シユウ先輩…いつもながら、朝から元気よすぎ  
ですね…」

ヒカルが呟く。この一人の名はマサヤとシユウ。

マサヤ「シユウさん 朝バトル行きまじょう ! ! !  
シユウ「OK ! ! いっくNO ! ! メタグロス ! ! !」  
マサヤ「ドリュウズ ! ! GO ! ! !」

早速、朝一番にバトルをするマサヤとシユウ。

? ? ? F 「なんだなんだ？また、マサヤとシユウか！？」  
? ? ? G 「にぎやかなこつた」

また、テントから一人の青年が出てきた。

ブイマル「おひ、リョウヤ、ハヤト、おはよ  
ヒカル「おはよう、じぞこます！ ! !」

二人の名はリョウヤとハヤトである。

リョウヤ「おはよ」

ハヤト「おは…なんか腹へった」

ブイマル「そうだな、メシにするか」

そしてブイマル、ヒカル、リョウヤの三人は朝御飯の準備を始め、  
ハヤトは魚を捕るため、川へ行つた。

リョウヤ「行け、ロトム ! ! !」

リョウヤがモンスター・ボールを投げると中からプラズマに身を包んだポケモン、ロトムが出てきた。

ロトム「トム～」

「ここでリョウヤは何やら特徴のあるモーターが付いた電子レンジを取り出す。」

リョウヤ「ロトム、こいつを頼む」

ロトム「ロトッ～」

ロトムは電子レンジの中に入り、ヒートロトムへとフォルムチェンジする。

リョウヤ「よし。ロトム、よろしくな。じゃあまずはこれと…あれと…」

ロトムはリョウヤに渡された冷凍食品を、どんどん暖めていく。と、そこへハヤトが帰ってきた。

ハヤト「お～し、魚捕つてきたぞ～」

ブイマル「でかしたぞ！ハヤト」

ブイマルが焚き火でご飯を炊きながら言つ。

ヒカルは自分のエレキブルの炎のパンチ（弱火 中火）で目玉焼きを作つている。

ハヤト「よし、じゃあ俺も魚を焼くとするかな。いくぞー・サザンドラー！」

ハヤトはボールから、ザザンドラを出す。

ハヤト「ザザンドラ、弱火の火炎放射」

ザザンドラ「ドラッ！！」

ハヤトとザザンドラは魚を焼き始めた。

シユウ「メタグロス、コメットパンチ！！」

マサヤ「穴を掘るでかわせ！！」

シユウとマサヤの二人はバトルをしている。  
ミストはそんな6人を黙つて見守つている。そして、食器の用意  
をしはじめる。

準備をしていないシユウとマサヤは量を減らされ、次こそはちゃんと準備するぞ、と毎には忘れる誓いをする。

これがこの7人の、日常の光景である。

午後4時頃、ヒマワキシティ。

ツリーハウスの立ち並ぶ町に、あの7人の姿があった。

ブイマル「ああ、まずはポケモンセンター、そこからヒマワキジムだな」

どうやら彼等は、ジム巡りをしている様だ。しかし全員ではない様子。

ポケモンセンターとは、赤い屋根の大きな建物で、そこでは受付にジョーイさんという人がいる。この人たちは皆親戚で女の人はそつくり同じ顔をしている。

シユウ「絶対バッヂをGETするぞ」

マサヤ「頑張って下さいよ ブイマルさん にシユウさん」

リョウヤ「ひとまず、俺らはトレーニングにでも行くが、ハヤト」

ハヤト「そだな。ヒカル、お前も来るか?」

ヒカル「はい…よろしくお願ひします…！」

ミスト「…………」

7人はポケモンセンター…通称ポケセンへと向かった。

ヒマワキシティのポケセンは町の西側にあった。早速入り、ジョ

ーイさんに傷ついたポケモンを預ける。その後、預けなかつたポケモンと共にそれぞれの場所へと向かつた。

## ヒマワキジム

シユウ「たのもおおおおおおおおおおおーーー！」

ブイマル「騒がしいぞ。迷惑だらうが、シユウ」

大声を出してジムに入るシユウをブイマルが抑える。

二人が奥に進むと、そこには飛行機のパイロットの格好をした女性、ヒマワキジム、ジムリーダーのナギが立つっていた。

ブイマル「お久しぶりです、ナギさん」

ナギ「あら、誰かと思ったらブイマル君にシユウ君じゃない。久しぶり。昨年のリーグは惜しかつたわね」

どうやら彼等は彼女と顔見知りの様だ。

ブイマル「はい、まさか予選の最初で相手がミストーとは思いもしなかつたですよ」

シユウ「あのマサムネとかいうやつ……かなり強かつた……」

シユウが珍しきうなだれ……

シユウ「だが俺はへこたれないＺＥＥＥ！－！次は必ずかあつ  
－！－！」

ても無かつたようだ。

ナギ「そう言えばあの5人はリーグでBEST8まで入つてた  
つけ？」

シユウ「はいつてましたＹＯＯ！－！」

この世界では、各地方にあるジムのジムリーダーを倒すことで手に入るバッヂを8個、集めることで5つの地方で行われるポケモンリーグと言つ大会に出ることが出来る。まずは、バッヂを8個あつめたトレーナーと昨年のリーグでBEST8入りした者で予選を戦う。その勝者と昨年のBEST4入りしたもので本選を行い、優勝者を決める。

さらに、優勝者と準優勝者はこの世界で最もレベルの高い、全ポケモントレーナー憧れの大会…ワールドチャンピオンリーグ（通称WCR）に参加することができる。WCRに参加出来るのは、他に各地方の四天王、チャンピオン、フロンティアブレーン等の凄腕のトレーナーばかりだ。2か月にも及ぶ総勢40人ほどが争うリーグ戦のチケットは、プレミアがつくほど。

開催する地方はローテーションで変わり、昨年はシンオウ、今年はイツシユで行われる予定だ。

ブイマル「ミストが昨年のホウエンリーグ優勝、WCRで18位でしたね。ハヤトとリョウヤが準決勝で引き分けたんで昨年はホウエンから3人、WCRに行つたことになります」

シユウ「リョウヤはWCRで28位、ハヤトは26位だったよな  
ナギ「みんな頑張つてるわね」

ナギは感心しているが、ブイマルはまだ心残りがあるようだ。

ブイマル「本当なら俺達の中でミストの次に強いのは俺なんだけ  
どな……」

シユウ「勝負は時の運、ダツゼエー！！！」

シユウがブイマルを持ち前の高いテンションで励ます。

ブイマル「そうだな…よし！ナギさん、ジム戦お願いします！！  
！」

再び元気になったブイマルはナギにジム戦を申し込む。

ナギ「いいわよ。こっちも実力を測る、何てことは言わずに全力  
でいくから！…セイカ、審判をお願い」

セイカと呼ばれたヒマワキジムの門下生はバトルフィールドの手  
前に立つ。ブイマルとナギも配置につく。

セイカ「では、今からヒマワキジム、ジムリーダーのナギとチャ  
レンジャー、ブイマルのジム戦を開始します。ルールは3vs3の  
勝ち抜き戦、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます。  
それでは、バトル開始！！！」

勝負は一瞬でついた。

セイカ「ジ、ジムリーダーの…チルタリス戦闘不能……よつてこの勝負、チャレンジャー、ブイマルの勝利」  
ナギ「流石ね……」

一瞬で3匹のポケモンがストレート負けし、項垂れるナギは倒れているチルタリスをモンスター・ボールに戻す。

シユウ「よ～し、次は俺と…」

飛び出そうとするシユウを、ブイマルは自分のポケモンをモンスター・ボールに戻しながら止める。

ブイマル「まで、今ナギさんとそのポケモンは戦つたばかりだぞ」  
ナギ「お気遣いありがと、ブイマル君。私は今からポケモン達をポケモンセンターに預けてくるわ。シユウ君とはその後、さつきとはまた別のポケモンで相手してあげるから」  
シユウ「まじすか？よつしあ…！…ヒヤホ～オウイ」

今のナギの言葉を聞いて、テンショングが上がるシユウ。

そして、そのバトルもシユウが一瞬で制す。

シユウ「へへへ、バツチGETだぜーーー！」

目的を果たした二人は、ナギと別れ皆の所へ向かっていた。

ブイマル「もうすぐ待ち合わせの時間、急べぞ」

そして、集合場所では既に5人が待っていた。

ハヤト「遅いぞ～二人共～」

リョウヤ「勝つたのか？」

シユウ「勿論SA！！！」

ショウガヒマワキジムに勝った証、フュザーバッヂを見せる。

マサヤ「やりましたね　おめでとうございます　ブイマルさん  
ショウさん！！！」

ヒカル「じゃあ、次はトクサネシティですね  
ミスト」……行くぞ……

7人は歩き始める。  
次の目的地に向けて……

\* 7人のトレーナー \* (後書き)

後書き

さあ、新キャラ一気に7人登場で～す。

ナオヤ「出しすぎじゃね！？」

大丈夫大丈夫。心配ないわ。

ナオヤ「そうだろうか…」

「ウタ「次回はあのポケモンですよ～！あの……」

「ウタ君、それ以上は言つたら駄目だよ。

「ウタ「わかつてますよ、そのくらい」

ナオヤ「何だ何だ？何の話をしてるんだ？」

教えちゃ駄目だよ。

「ウタ「ハイ！」

ナオヤ「？？？」

「ウタ「さて、僕達はこの辺で」

さよなら～。あ、後あの7人はチートではありません。さて、

また、次回をお楽しみにーーーー。

## \*ダークライ\*（前書き）

Y e a h ! ! L e t ' s p a r t y ! ! !

ナオヤ「どうしたんだよ、（リアルの）俺の口癖なんか叫んで」「ウタ「パーティって…何か良いことでもあつたんですか？」

Y e s ! ! ! 祝 ! ! !

執筆中又は投稿前の本文消失10回突破！！！

ナオヤ「全然良い」とでもめでたいことでもねえ！？

だつて…もう既に12回……あらすじと前、後書きを含めたら15回消えてるんだよ、もう笑うしかないね。

アハハハハハハハハハハハハハ

ナオヤ「作者！しつかりしろ！！」

「ウタ「壊れないでください！！」

アハハハア～もうロリやだあ……

「ウタ「読者の皆さん、なんだか愚痴みたいになってしまい、誠にすみませんでした。それでは、本編スタート！！！」

## \*ダークライ\*

ミスト達7人がヒマワキシティを主発した頃、一匹のポケモンがホウエン地方の上空を飛んでいた。……ダークライだ。

ダークライ「くそつ、くそつ、くつそおおお！！！ラティオスもラティアスもジラーチもあの分からずや共がああああああああああああああああああああ！」

なにやら絶叫している。

実は先程、ラティオスとラティアスには「この戦いには、一切介入しない」と断言された上に、ジラーチに至っては「めんどくさい……もう寝る……」とまで言われていた。しかし特性のナイトメアやあくまで眠っていたジラーチを、無理やり起こしたダークライも悪いのだが。

ダークライ「……くつ…流石に6匹だけでは争いをくい止めるのはまず無理だらう……他に協力者を探さないと……」

その時、ダークライは北の空にオーロラの様なものが出ていた事に気づく。

ダークライ「あれば、たしか…………よし、行ってみるか」

ダークライは北の空に向かつて飛んだ。

ミナモ沖、上空。

？？？「何しに来た…ダークライ」  
ダークライ「…………デオキシス」

オーロラの下に居たのは、胸の中心に紫色の水晶を持つオレンジと薄緑色のポケモン、デオキシスだった。

ダークライ「…………ひとつ話したい事がある…聞いてくれないか？」

デオキシス「丁度いい、俺もお前に話があった」

？

それを聞いたダークライは、『デオキシスが自分達に協力してくれるとのかと期待したのだが…

デオキシス「ミコウやレックウザ達と共に戦わないか?」

期待どおりではない…いや、むしろ正反対の事を言つてきた。

ダークライ「…お前…ミコウ達と…」

デオキシス「嗚呼、俺はそつちに協力するつもりだ。ダークライ、お前が来たら戦力になる…………一緒に戦わないか?」

ダークライは首を横に振る。

ダークライ「……お前達のやつている事は間違つてing…あんな無茶苦茶な目的、果たされてよいはずがない!」

デオキシス「…そつか…お前が噂の戦争反対派か…」

デオキシスは敵意をむき出しにしてきた。

デオキシス「もう一度きく、俺達と来る気は無いんだな」  
ダークライ「嗚呼、無い」

デオキシス「残念だ…お前ならわかつてくれると思つたのだが…  
…それならしようがない……覚悟しろ、ダークライ」

一団はしばらく睨みあつていた。

デオキシス「しんそく…」

ダークライ「まもる…」

デオキシスは細身の素早い姿…スピードフォルムになり、ダ

－クライにしんそくで向かつて行つたのだが、ダークライはデオキシスがスピードフォルムになる一瞬の隙にまもるを繰り出し、しんそくを防ぐ。

「デオキシス「ちつ」

ダークライ（俺はデオキシスを倒す気はない……ひとまずこの場を収めなれば……）

デオキシスは弾かれた勢いでダークライの後ろに回り込みながら、体が全体的に鋭くなつた姿、アタックフォルムになる。

「デオキシス「ばかぢく……」

「ダークライ「ふいうちー！」

デオキシスがばかぢからで攻撃しようとすると、ダークライは先制技でさらに後ろに回り込み、先に攻撃。それにより、デオキシスのばかぢからは止められてしまった。

「ダークライ「ダークホール！」

ダークライは置み掛ける様に、敵を暗黒の眠りへと誘う技、ダークホールを使った。

「デオキシス「しんぴのまもり」

今度はゴツイ姿、ディフェンスフォルムに変わつたデオキシスがダークホールをしんぴのまもりで防ぐ。

「ダークライ（くつ……）」デオキシスを眠らせて、この場をどう

収めるのか考へよつと思つたんだが…）

せりに」テオキシスは、スピードフォルムへと姿を変え、

「テオキシス「しんそく…」

テオキシスは再び、しんそくでダークライに向かつていった。

ダークライ「まもる…」

ダークライは咄嗟にまもるを発動させたのだが…

「テオキシス「甘い…」

テオキシスはしんそくで攻撃せずにダークライの後ろに回り込む。

ダークライ（しまつた！……いや、奴はおそらく攻撃するときにはアタックフォルムになるだらうから、その隙に攻撃すれば…）

と、考えたダークライがあくのはじつをためながら振り向くと…

「テオキシス「ばかぢから…」

ダークライ「なつ…」

テオキシスはアタックフォルムにならず、スピードフォルムのまましんそくの勢いに乗つてばかぢからをはなつた。その速さに反応しきれなかつたダークライはばかぢからを真正面からくらう。ばかぢからは格闘タイプなので、ダークライに効果は抜群だ。

ダークライ「が…」

ダークライは倒れはしなかつたものの、よろめき、落下しそうになる。

その隙にデオキシスは、上昇しながらアタックフォルムへとその姿を変える。

デオキシス「終わりだ。めいそう…はかいこうせん!!」

ふらついているダークライに向かって、デオキシスは上から叩きつける様にはかいこうせんを放つ。

ダークライ「…………っ」

ダークライは悲鳴をあげる間もなく、遙か下の海へと落ちていった。

デオキシス「やつたか……だが、ダークライを捕らえておけば、後から有利になるかもしけんな……よし」

デオキシスはダークライが上がって来ない事を確認すると、自分の影の様な・分身の様な者を大量に造りだした。

それはダークライを探し、下方へと向かって行つた。

\*ダークライ\*（後書き）

後書き

ということで、ジンダイ初のバトルシーンでした。うまく書けた  
かな。（汗）

「ウタ」ていうか、ダークライさんの性格が最初と最後で違う気  
が…

……まあ、いいんじゃない？彼の個性なんだよ、きっと

「ウタ」ですか…次は僕たちだよね」

うん、「ウタのパートナーとなる守護神と呼ばれるポケモン達と  
は何者なのか！？」

「ウタ」次回もよろしくお願いします！！！」

## 守護神をゲットせよ・前編（前書き）

ウギアアア~~~~~!!!!

ナオヤ「どうしたー?..」

今氣づいた～まじで!!!!

「ウタ何がですか!!?..」

自分の受験が…3円と思つてた!!…1／24だ~~~~~  
ヽヽヽヽ

ナオヤ「2ヶ円も間違えてたじやん!!..」

「ウタどうすんですか!!?..」

……こまから2ヶ円くらい休ませてください… 士下座

ナオヤ「しょ~~~~がねえ~なあ~~、休ませてや~る、よ~」

……ありがとうござます（後から覚えとけよ…ナオヤ）

「ウタ「どこいりとで、唐突ですが、今年最後の一話、スタート  
です！」

ナオヤ「うちのボケ作者が迷惑かけて、本当にすみません…いつ  
もの事ですが今回はわざと酷い文章です…やはつづりの作者は間抜  
けです！」

.....  
反論出来ない。

## 守護神をゲットせよー前編

「ウタ達は村長の放った言葉に呆然としていた。

「ウタ「守護神？」

コウヤ「儀式の元になつてゐる話…聞いた事も無いな…」  
メイ「一体どんなポケモンなんですか？」

村長「…すぐにわかる、ウタ、こっちへ来い」

「ウタ「あ、はい…」

「ウタが石板の前に立つと、村長は2つのモンスター・ボールを取り出した。

村長「最初はホエルオー……」

モンスター・ボールを1つ、石板の上へと乗せる。

村長「最後はジーランス……」

今度はもう一つのモンスター・ボールを、石板の下に置く。

村長「そしてすべてが……ひらかれる」

ズズズズズズズズズズズズ

急に石板が震動を始める。

メイ「なななな」

コウヤ「何だ！？急に！…？」

ナオヤ「石板が……」

コウタ「割れしていく…………」

「コウタ達の言つ通り、石板は音を立てて割れ始めていた。

村長「今のは、この石板に書かれている言葉……そしてこの場所、『御触れの石室』の守護神を呼び出すために必要なことだ…………」

そして、完全に石板が割れた。その奥には、それぞれ氷、岩、鋼の体をしたポケモン達が立っていた。

コウヤ「…………村長…………」

村長「なんだ？」

コウヤ「これは……ビックリする事ですか…………」

コウヤはそのポケモン達を見て、驚愕していた。

メイ「あのポケモン達は？」

ナオヤ「見た事ないポケモンだな……」

コウタ「コウヤさん、あのポケモン達は……何なんですか…………？」

コウヤ「俺も古い文献とかでしか見た事はないんだが…………まさか

「こいつたとは…………夢にも思わなかつた…………」

村長が4の方に向き直る。

村長「…………嗚呼、あのポケモン達は……

伝説のポケモン、レジアイス、レジロック、レジスチルだ

「ウタ、ナオヤ、メイ」……

ユウヤ「村長、何故この3匹がこんな所に……」

その時、村長が自分の方を見た事に気づいた「ウタは、とっても嫌な予感がした。

「ウタ「あの……もしかして……この3匹って……」

????A「ソノマサカダ、マスター」

急に声が聞こえた。

ナオヤ「何だ、この言葉は……？」

????A「ワタシダ」

皆は声のする方を見る。

レジスチル「ワタシハ、レジスチルトイウ」

全員「…………喋ったああああああああ……？」

「？？？B 「喋つちぢやあ駄目なのかよ、肩共が  
？？？」「ロック、あなたは何時も口が悪いですよ」

せりにあと2人…いや、2匹の声がした。

「ウタ「まさか…後の2匹も…」

レジロック「よつ、お前が俺達のパシリになつてくれる奴か。頼  
りねえなあ。と、俺はレジロック」

レジアイス「私はレジアイスです。ロック、言葉を慎みなさい。  
あの人はあなたのパシリではなく、（あなたみたいに馬鹿そうです  
が一応）マスターですよ」

レジロックは今の言葉で、頭にきたよつだ。

レジロック「なんだと…？」のオカマが！…！」

レジアイス「誰がオカマなんですか？」

レジロック「お前が女言葉ばかり使って気持ち悪いからだよ…！  
！」

今のはレジアイスもカチンときたようで、

レジアイス「これは敬語と言います。あなたみたいな（単細胞で  
短足の）人にも（しおがなく）敬語を使って（やって）るんです  
から感謝しなさい」

レジロック「んなもんするかよ！第一全部聞こえてるぞ…！」の  
氷オカマが…！」

「ウタ達全員が呆然としてるなか、口喧嘩（といつよつ罵り合ひ）  
を始めた。

レジアイス「いい加減怒りますよ?」

レジロック「勝手に怒つとけよ、オカマ野郎!!!!」

レジアイス「オカマオカマと…あなたはそれしか言えないんですねか?」

レジロック「ひるせえ……やんのか」「ワタ!!!?」

レジアイス「良いですよ。後で後悔しても遅いですからね」

レジロック「おう!!!上等だ!!!!来い!!!!」

レジアイス「行きますよ」

2匹は身構える。

「ウタ「オカマとかいつてるけど…」

ナオヤ「兄貴、あの2匹って性別あんの?」

ユウヤ「いや、無い」

メイ「第一…あの無表情で口喧嘩されても……」

村長「本当に怒っているのか解らんな、ナレーターのじょうもな

い

「ウタ「ナレーター?」

村長「いや、こっちのはなしだ」

レジアイス「きあいだま」

レジロック「失せろ!きあいパンチ!!!」

ズドオオオン!!!!

レジアイスの腕からはなれたオレンジ色の氣合の塊と、レジロックの拳に集まつた氣合の塊がぶつかりあつた。

「ウタ「すごい迫力だ!!!!」

ナオヤ「言つてる場合か!!!!?」

レジアイス「ラスター・カノン」  
レジロック「ほのあのパンチ！－！」

レジアイスの放った灰色の鋼弾を今度は炎を纏つた拳ではねかえすレジロック。

レジアイス「でんじぼう」

レジロック「かみなりパンチ！－！」

レジスチル「ヤメローマモル！－！」

今度はレジスチルが間に入り込み、レジアイスの電撃を帯びた弾とレジロックの雷を帯びた拳をまもるで防ぐ。

「おっ、止めに入つたぞ」  
メイ「鋼タイプは岩タイプにも、氷タイプにも強いから…もしかしたら止められるかも…」

レジアイス「きあいだま」

レジロック「きあいパンチ」

一匹の技の間には、まもるを終えたばかりのレジスチルがいる。

レジスチル「チョットマセ ギヤアア！－！」

まもるは連續で使えないのに、レジスチルはもう二匹の攻撃を受けてしまった。

レジスチル「クツ…マダd」

レジアイス「鉄屑は黙つて下さい、れいとうゲーム」

レジスチル「ああん？ うつぜえんだよ片言野郎！ ……れいとうパンチ！」

レジスチル「…………」

レジスチルは、完全に凍りついた。

「ウタ「あ…」

ユウヤ「ヤバいな…」

メイ「レジスチル…弱つ！？」

ナオヤ「…」

何やらナオヤがレジスチルに押み始めた。

「ウタ「どうした？ ナオヤ？」

ナオヤ「あのレジスチルと言つ奴…何か俺と同じ匂いがする… 気のせいか？」

ナオヤは真顔で言つ。

「ウタ「う、うん… 気のせいじゃない？」（絶対気のせいじゃない！ 例え命をかけても氣のせいな訳あるか！ ナオヤとレジスチルは似た者同士… いや、もはや兄弟同然の境遇だよ！…！）

「ウタは心の叫びを押しとどめ、誤魔化した。

ナオヤ「そつか… そうだよな…」

「ウタ「そつ、そう！ そつだつて！…」

村長「「ウタ… 話している所悪いが… 今はそれどころではないだろ？ ほら、受けとれ」

村長は「ウタに3つのモンスターボールを投げ渡す。

「ウタ「えつ！？」

「コウタはあたふたしながら受け取った。

「コウタ「あの～もしゃ～僕にこの3匹をゲットしようと？」  
村長「そうだ」

「コウタはお互いに技のぶつかり合いをしているレジロック、レジアイスと完全に凍りついているレジスチルの方を見る。

「コウタ「すみません。無理です」  
レジスチル「コウタヨ、オマエハワガアルジタチニワタシタチノマスター・トシテエラバレタノダ」

レジスチルが凍つたまま話しかけてきた。

レジスチル「ダカラ、ハヤクワレフレヲツカマハ…」

レジロック、レジアイス「だまれーーー黙りなさい」

レジロック「ほのおのパンチーーー！」  
レジアイス「きあいだま

再びレジスチルに攻撃をする一匹。

レジスチル「オマエタチヤメ グガバツ」

レジスチルは反対側の壁まで吹き飛ばされ、祠改め、御触れの石室の壁は悲鳴をあげる。

「コウタ「村長、帰る時は何処から出ればいいんですか？」

村長「いや、帰る気なのか？」

「コウタ「はい。もう付き合つてられません。僕は普通のポケモンで十分だ…」

レジスチル「マスター…」

どうやらレジスチルは（一応）無事だったようだ。

レジスチル「マ…マズハワタシ…シカマ…エ…ロ…バタッ」

レジスチルは倒れた。

村長「ほら、コウタ、今の内にモンスターボールを」

村長はそう言つが、肝心のコウタは…

「コウタ「ああ、空が綺麗だ…」

現実逃避をしていた。

「コウヤ「お~い、戻つてこ~い、ここには空はないぞ~」

「コウタ「アハハハハハハハ天井が綺麗だなあ」

「コウヤ「…行け、ペリッパー」  
ペリッパー「ペリ!」

コウヤは自分のモンスター・ボールからペリッパーを出した。

「コウヤ「ペリッパー、そのぼけっとしてる奴にみずてつ」

「コウタ「アハハハハハハここはどこ? 僕はだれ?」

「ウタヤ…………やつぱりハイドロポンプ」  
ペリッシュパー「ペッシュリイー！」

ペリッシュパーは口から強烈につきつけ水を打ち出す。

「ウタ「バボッ…」

「ウタの顔面に水がかかる……とこうよつづつかつた。

「ウタ「何するんですか！……」  
「ウヤ「いいから状況をよく見ろ！……あんなに『丘』が暴れてい  
てここが無事だとでも思つのか！……ここまで耐えてるのが奇跡だつ  
て！……」

「ナオヤ「あつ…」

「メイ「そう言われてみれば…」

「ウタ「ヤバイかも…」

そこにはいる5人は一齊に青ざめる。

村長「いかん……これは海底だ……崩れたりしたら……」「ウタ……」

「ウタ「はつ、はこ……」

「ウタは慌てて返事をする。

村長「早くレジスチルを捕まえんか！……」

「ウタ「ははははー……」（ここのかな……）

「コウタは倒れているレジスチルに躊躇しながらモンスター・ボールを投げる。

レジスチルはモンスター・ボールから放たれる赤い光に吸い込まれ、そのままモンスター・ボールはその場で振動を始める。

そしてモンスター・ボールは完全に静止した。

「コウタ「レジスチル…ゲットしちゃた…」  
メイ「伝説のポケモンかあ…コウタ凄いじゃん！」  
ナオヤ「強いんだろうな…いいなあ…」

と、話しているのも束の間、

レジアイス「ふぶき」  
レジロック「ぶつ飛べ！…ストーンエッジ！…」  
ズドオン！…！

一匹の威力最強の技がぶつかり合い、大きな震動が起こる。

それにより、堂々御触れの石室の壁にひびが入り、浸水し始めた。

村長「ヤバイぞ！皆、ダイビングが使えるポケモンを出せ！…」  
ユウヤ「おう！ジー・ランス！…」  
ナオヤ「お、俺も？…ジー・ランス行つてくれ！」  
メイ「私も！？わわっ、ホエルコ…」

皆は自分のポケモンを出すが、

「コウタ「そう言えば僕…まだジーランスもホエルコも貰つてない…」

「コウタは何も出来ず、呆然としていた。

村長「あっ！すまんコウタ！！ポケモンを渡すの忘れてた！？」  
ユウヤ（またか…何時もは一年に二、三回忘れるから、今年はいい方なんだが…）

ユウヤは恋れっぷい村長に内心呆れていた。

村長「ひとまずこいつに乗れ！ジーランス！…」

村長は自分のジーランスをだす。

その時、堂々御触れの石室が本格的に崩れ始めた。

村長「本格的にヤバイぞ…皆、早くダイビングの指示を…」

4人は自分のポケモンに、コウタは村長のジーランスに掘まつた。

「コウタ（結局僕のポケモンについてはスルーですか…）  
村長「いぐで…」

村長、ユウヤ、ナオヤ、メイ「ダイビング…！」

バシャン！

5人はダイビングを使い、空気の膜に包まれて崩れる祠から抜け出した。

レジロック「ガバババババ……」

レジアイス「勝負ありましたね……」

見ると、レジアイスVSレジロックの勝敗が着いたようだ。岩タップであるレジロックは水に弱いため、溺れていた。レジアイスは平氣そうな感じだ。

「ウタ「やつと終わったみたいだね」

村長「よし、一度村へ戻る。このまま居れば海流によつて戻れ……」

レジアイス「とどめです。

かみなり」

全員「ハア……?」

その時、眩い光と全員の悲鳴がなり響いた……

## 守護神をゲットせよー前編（後書き）

後書き

アイスとロックのキャラが酷い…

守護神をゲットせよー後編（前書き）

ナオヤ「これも前編と同じく酷いな」

だつて…前編は今まで一番長かったのに…投稿直前に消えたんだから…これも前、後書き消えたし…

「ウタ「でも酷いのは変わりませんよね」

……………（泣）

「ウタ「では、後編スタート…酷いですが、こんな作者のために読んでやってください！お願いします…！」

ナオヤ「後、この小説に主人公最強設定が入る予定はありません」

## 守護神をゲットせよー後編

「ウタ達は、痺れながらも海流に乗つて島へ戻ってきた。

「ウタ「酷い日にあつた…」

「ウヤ「あそこで雷を使ひつとは…」

メイ「本当に…あつ！」ウタ…！…」

メイが指差した先には、完全に氣絶しているレジロックがいた。

村長「さあ、早くモンスター・ボールを！」

「ウタ「ええつー？僕がですか！！？」

村長「いいから早く！」

「ウタ「はつ、はい！！」

「ウタは躊躇しながらも、レジロックにモンスター・ボールを投げた。

レジロックは赤い光に吸い込まれ、モンスター・ボールは揺れ始める。

そして、静止した。

「ウタ「……レジロックまで…」

ナオヤ「すげえ！…じゃあレジアイスは俺が

レジアイス「そつは行きませんよ」

レジアイスが海から上がりつて來た。

レジアイス「私のマスターはそこ（グズで間抜け面のトーンマである）少年…」ウタ君だけです。私は残念ながら（うやむやで明らかに馬鹿と断言できる）あなたに捕まるつもりはありません」

「ウタ、ナオヤ」

メイ「今さらひとつヒドい事こったわね……ナオヤについてはその通りだけど……」

ナオヤ「…………」（泣）

「ウタは泣き田になつてゐるナオヤを無視し、レジアイスに向か直る。

「ウタ「レジアイスさん」

レジアイス「はい、なんですか？」

「ウタは真剣な顔でレジアイスに頭をさげ、

「ウタ「『めんなれ』」

謝った。

レジアイス「…………そんな事はいいです…早く掛かつてきなさい」

「ウタ「？…？」

レジアイス「ロックと鉄屑は運で捕まえられましたが、私はそうは行きませんよ（ぼつぼつぼつにしてあげます、間抜け面の）」ウタさん」

「ウタは急いで首を横に振る。

「コウタ「いや、だから僕は…」  
レジアイス「やらないんですか？（早くぶちのめしたいんですが  
…）」

「コウタは、レジアイスを捕まえたくないと黙つのが顔に出でていた。

村長「コウタ！早く捕まえんか！…」  
コウタ「だつて…」

「コウタの脳裏にさつきからレジアイスの言動が浮かぶ。

「コウタ（捕まえたらいつも一緒にいるんだよな…）

「コウタはそんな事を考えていたが、

村長「ほりー！こいつを受けとれ…！」

村長は、そんな事お構いなしにひとつの中スター・ボールをコウタに投げ渡す。

「コウタ「わつー…これは…」

その中には、ジーランスが入っていた。

村長「こいつをやるから、早く捕まえんか！」

「コウタ「は、はいっ！頼むよ、ジーランスー！」

「コウタがボールを投げると、中から光と共に、ジーランスが出て

きた。

ジーランス「……」

「ウタ「…………ジーランス?」

ジーランス「ZZZ…」

「ウタ「寝てるし…」

レジアイス「……私の負けです」

レジアイスがジーランスを見た瞬間、負けを認めた。

全員「え…」

レジアイス「」「ウタさん、早く私を捕まえて下さい。さもないと

…」

レジアイスはれいとうビームを構える。

「ウタ「わかつたわかつた(汗) モンスター・ボール…」

「ウタはこの急な展開を呑み込めぬまま、モンスター・ボールを投げるとレジアイスは何の抵抗もなく入り、やがてモンスター・ボールの振動も止まる。

「ウタ「…………」

ユウヤ「…………」

ナオヤ「…………」

メイ「…………」

村長「…………」

沈黙が続く。

「ウタ「どういう事?」

村長「さあ?」

5人は、その後村人に見つかるまで呆然と佇んでいた。

守護神をゲットせよ!・後編（後書き）

後書き

レジロック「アイス、何でワザと捕まつたんだ?」

レジアイス「…あのジーランスのレベルは…でした」

レジロック「まさか!? 初心者用だろ!!?」（汗）

レジスチル「イマノワレワレノレベルハ s」

レジロック「うるせえ!…のろいのろいのろいきあいパンチ!

!-!

レジアイス「チャージビーム×6+きあいだま」

レジスチル「グギアアア!…キラン」 星になりました。

ナオヤ「はつ！」

どうした?

ナオヤ「なんか…レジスチルの事が妙に心配だ…あいつは何故か他人とは思えない…」

ま、まあそりゃうね…（苦笑）

それでは、今から1／24まで、受験のため連載を休ませてもら

います。もしかすると休憩時間に感想の返事を書いたり、短いのを投稿するかもしれません。では、この辺で失礼しました。（礼）

旅立ち・1（前書き）

勉強の合間にちょいちょい書いてました。（汗）  
レジロック「にしては短かすぎだあ！！ドレインパンチーーー！」  
うわああ！！！ち、力が抜けていく…………バタツ  
レジロック「ひ弱な奴だな。さて、こっちも……」

？？？「起きたやバカコラアーーー！」

「ウタ「へブツ！」

「ウタはいきなり、誰かに殴り飛ばされて目が覚めた。

「ウタ「いてて…」」は…？」

「ウタが周りを見渡すと、見慣れた自分の部屋が目に入った。しかし、そこには明らかに場違いな人…いや、ポケモンが一匹…

レジロック「やつと起きたか。寝坊すけ」

レジアイス「おはよづございます。（いつもながら間抜け面の）「ウタさん。あの（単細胞短足の）パンチは痛かったですか？（そうだったら幸いです）」

「ウタ「…………」

あまりの事に、ウタは放心状態に陥っていた。

レジロック「にしても、ポケセンってのはいことだな。一発回復だぜ！」

レジアイス「（間抜け面の）「ウタさん、（馬鹿みたいに）ぼつとしてますが大丈夫ですか？」

「ウタはこれが現実だとつ事をようやく理解し、レジアイス（遅すぎですよ、のろま）一匹に向かい合つた。

「ウタ「いくつか、質問良いですか？」

レジアイス、レジロック「いいぜ、いいですよ」

「ウタ（ああ、いいんだ…）

ダメだと言われると思つていて「ウタは少し驚くが、氣をとりなおして言った。

「ウタ「……なんでここにいる訳！？いつポケセンまで行つた！？選らばれし者つて、マスターつて何！？そもそも決め方テキトージャニイ！？第一レジスチルはどう！？それに何で君達はレジスチルに厳しい訳！？」

一二匹は途中までは冷静に聞いていたが、なぜレジスチルに厳しいのかを聞かれた瞬間、田に見えて動搖した。

「ウタ「？？？。レジスチルがどうかしたの！？」

レジアイス「スチル…………あいつは…………」

レジロック「ウタ……だつたな？…………他のは出来るだけ答えるだが、最後の質問だけは…………答えられねえ…………答えたくねえ…………」

「ウタが呆然とする中、一二匹は肩を震わせる。人間なら「泣いている」という感じだった。

レジロック「少なくとも俺達は…………」

レジアイス「スチルを…………信用していない…………とでも言つておきます…………あんな鉄屑なんか…………」

「ウタ「…………（汗）」

予想外の暗い雰囲気になつてしまい、困惑する「ウタ。と、その

時、

お母さん「コウタ～歸来てるわよ～」

コウタ「お～い、コウタ！早く来こよー！」

下から、コウタのお母さんとコウタの声がした。

旅立ち・1（後書き）

## 後書き

よし、終わったと

レジアイス「おや、（バカで間抜けでアホでヘタレの）作者さん  
じゃありませんか。今回は短いですね、チャージビーム」

アハハハハハハ癪れひれ

カキー（色々な意味で一番酷いキャラだ、）

レジアイス一何か言いましたか?ロックオン、

絶対零度

たるにあれば君は震えな

ニシハラ  
アヤマ

!! カチーン

レジアイス「次回もこれ位短いと思われますね。」（このボケ）作

者の（勝手な）都合で「

レジアイスの…性格を酷くし過ぎた…

レジアイス「絶対零度」

力チコチーン

レジアイス「今回も短すぎますね」

レジロック「さて、どんなお仕置きがいいか…」

……此處にわれはないで

レジデンス・絶対零度

レジロック「岩！石！砲！」

レジアイス「（肩）作者は星になりました」

からな「

「ウタ「今行く…ちよつと待つてて」

「ウタは、ひとまず声をかけてきたお母さん達に返事をし、レジロックとレジアイスに向き直る。

「ウタ「…つらい事があったのは分かっただけ…ともかく今はボールに戻つてくれない?」

レジアイス「…………わかりました」

レジロック「…………わかったよ」

「ウタは一匹をボールに戻し、机の上にあった二つのモンスター ボールを取つてから（その中の一匹は氣絶していたが「ウタは気にせず）下のリビングへと向かった。

リビングには、「ウタの予想通りナオヤとメイ、村長もいた。時計を見ると、もう一時半過ぎだ。

ナオヤ「おはよー!」「ウタ、疲れたか?」

「ウタ「う、うん。(田代は最悪だつたけどね...)」

「ウタは少しはぐらかす。と、そこへ村長が話に入つて來た。

村長「コウタ、もう旅立つ用意は出来ているか？」

コウタ「あ、はい。一応」

元々、ポケモンを貰つたらすぐに旅立つ予定だったので、荷物などは昨日用意して玄関においてあった。

村長「そうか、では今から旅立つんだな」

コウタ「はい、朝、飯を食べたら、もう行きます（とこりよつ、時間的にもう昼か…）」

コウヤ「それなら俺が、気球でカイナまで送つてくよ、どうせ用があるし」

コウヤが話に入つて來た。

メイ「いいんですか！？やつたー！」

メイは飛び上がつて喜ぶ。

「ウタ（じゅうとうじゆうは女のは子だなあ）  
ナオヤ（じゅうとうじゆうは女のは子だな、何時もとは大違いだ）

二人はそれを見て、ほとんど同じ様な感想を抱いたが、

メイ「ナオヤ～、じゅうとうね～」（怒）

……メイには聞こえたようだ。

ナオヤ「ヒィ～～～お許しを～」

と、そこへ

ユウヤ「メイ、そのくらいにしておけ。もう行くぞ」

ユウヤがメイを止めた。

ナオヤ「兄貴～ありが…」

ユウヤ「その代わり、気球の中でしていいから」

メイ「はい」

ナオヤ「…………」（兄貴に期待した俺がバカだった……）

泣

ナオヤはもう、半ば人生に絶望していた。

## 旅立ち・2（後書き）

後書き

くつ……アイスにロックは調子に乗って……こいつなつたら、まだまだあいつらの古傷をつついて……  
レジアイス「絶対零度」  
レジロック「岩！石！砲！！！」  
……キラン 叫ぶ間もなく星になつた。

レジアイス「  
レジロック「

あの～どうかしました？

レジアイス「…酷いほどに短い…」  
レジロック「…れは無いだろ…」

「ううう……」

1

レジアイス「この『旅立ち』シリーズの出来も最低最悪」

レジロック「一度、懲りしめる必要があるな」

ପ୍ରକାଶକାଳୀନିତି

レジロッカ「お前に全てをぶつけちゃう。」

ちよつ…何でそんな技が使える訳…

レジアイス、レジロツク」作者だけに特別です（だ！）

このモードがなかなか見つからず、セグメント

せん  
じ

そういう意味じゃなくて

スル一か

### 旅立ち・3

「ウヤ「氣球の準備できたぞー！」

「ウヤの目の前には、浮かび上がる用意の出来ている氣球と、それに繋がれたペリッパーがいた。

メイ「空の旅、楽しみね。ナオヤ」（黒笑）

ナオヤ「…………」（冷や汗+大泣）

メイとナオヤも仲良くしている。ちょっとナオヤが縛られていたりするが。

「ウタ（カイナに着いたら…よし、僕ならできるー）

「ウタは心の中で何かを決心していた。

村長（そういうばなぜレジアイスは）「20前後のジーランスに負けを認めたんだ？」

見送りに来ていた村長が自分が疑問に思っている事を考へている間に、

「ウヤ「皆、乗り込め！」

「ウタ、メイ「おー！」

ナオヤ「…おー…」

お母さん「行ってらっしゃーい

全員元気よく乗り込み、氣球は飛びたつた。

メイ「さて、ナオヤ、紐無しバンジーとパラシュート無しスカイダイビングどっちがいい？」

気球がある程度飛び上がった後、メイがナオヤに聞く。

ナオヤ「…………」

その後、気球の中で何が合つたのかは、その場に居た者しか知らない。勿論、誰も語るうとはしなかった。ひとつ言える事は、その後ナオヤが「あれ？俺って生きてるの？マジで！？」と本当に不思議そうな顔で言っていた事だけだ。

そして一行は、カインナシティに到着する。

### 旅立ち・3（後書き）

後書き

レジアイス「絶対零度」

レジロック「若……石……砲……」

…キラーン　　この世の果てまで飛んでった。

「ウタ「ん？置き手紙が…』これからマジに執筆休みます。後、  
【受験だから休みます】といつ前、後書きは1／24に消しておきます』だつて

リョウヤ「といつ事で読者の皆、来年の一発目は俺達だぜ…」「  
ハヤト」もうそこ時にはあけおめの時期、とっくに過ぎてるだろ  
うな

「ウタ「執筆再開は1／24ですので、早ければすぐ投稿します  
！来年もよろしくお願ひします…！」

\* もうひとつの玉露こ\*（前書き）

もうだめだ!!!!僕の勉強しないといけないという理性は書きた  
いという欲望に勝てなかつた!!!!ということで投稿です!!!!

「ウタ「決意弱つ……?」

ナオヤ「しかも俺達の出番は?」

後3、4程無し……!

「ウタ、ナオヤ「……」

ではつ……!本編スタート……!

\* もうひとつのお話\*

「ウタ達が村から旅立った頃…」

ヒマワキシティとミナモシティを繋ぐ120番道路。沢山の背の高い草が鬱蒼と生えるこの場所で、あの7人のトレーナー…ミスト達が昼食の用意をしていた。周りの草は刈り取られている。

リョウヤ「じゃ、そろそろ水汲みにでも行つてきますか」

ハヤト「俺も魚でも採りに行くか」

ブイマル「おう、行つてこい！ 飯は俺とヒカルに任せろ…こと

で俺は飯炊くか

ヒカル「じゃあ、僕はスープでも作りますよ」

その会話の後、リョウヤとハヤトは近くの川へと向かって行つた。

121番道路、送り火山近くの水道  
此処に先程出発した二人の姿があつた。

リョウヤ「よし、ロトム…ウォッシュユロトムだ…！」

ハヤト「ルカリオ！ 行け…！」

ロトム「トム…」

ルカリオ「リオツ…」

二人は芝刈機の姿をしたポケモン、カットロトムと、ルカリオを繰り出した。ロトムはすぐさま、リョウヤの持つて来ていた小型の洗濯機に乗り移り、ウォッシュユーロトムになる。

リョウヤ「ロトム、いつもの通りだ」

ロトム「ロトッ！」

ハヤト「ルカリオもだ！」

ルカリオ「オツ！」

ロトムは尻尾の様な管で水を吸い込み、ルカリオはサイコキネシスで魚を探る。

ある程度採つた時、リョウヤが何かに気づいた。

リョウヤ「ん？ 何だ、あれは？」

ハヤト「え？ どれだ？」

リョウヤ「ほら、川の反対側の岸辺」

リョウヤが指差した先には、何やら黒い何かが倒れていた。

ハヤト「あれは… ポケモンか？」

リョウヤ「さあ？」

ハヤト「ともかく取つてみるか。ルカリオ、サイコキネシス！」

しかし、それは動く気配がしない。

リョウヤ「悪タイプのポケモンか？」

ハヤト「みたいだな」

リョウヤ「となると… 」ついで、ラグラージ！』

ラグラージ「ラ～ジ！」

出てきたラグラージは、バトルと思い威嚇の雄叫びをあげる。

リョウヤ「ラグラージ、あそここのポケモンを連れて来てくれ」

ラグラージ「ラ…ラグ…」

ラグラージはバトルではないと知ると少し落胆したが、すぐに立ち直ると川に飛び込みその黒いポケモンを抱えて戻つて来た。

リョウヤ「こいつは…まさか…？」

ハヤト「こいつと生きている内に会えるとはな…」

そのポケモンを見た2人は驚愕する。

ハヤト「ひとまずブイマル達の所に戻ろう」

リョウヤ「嗚呼、そうだな」

2人とロトム、ルカリオ、黒いポケモンを抱えたラグラージはもと来た道へと戻つて行つた。

ブイマル「お、2人共遅かったな…ん？ラグラージ、何だそれは？」

リョウヤ達が戻つてくると、何時もどうりご飯を炊いていたブイ

？」

マルが、2人と3匹の連れてきたポケモンに気付いた。ついでに、ヒカルは結構な大きさの鍋でコンソメスープを作つており、シュウとマサヤはこれまで何時もどうりバトルしていた。

リョウヤ「おう、実はな…」

マサヤ「つばめがえし…」

ハヤト「川に行つたら…」

シュウ「シャドーボールDA！…！」

リョウヤ「川の向こう岸に…」

マサヤ「マジカルリーフ…」

ハヤト「こいつが倒れてて…」

シュウ「れんごくでうち落とSE！…！」

リョウヤ「それで俺のラグラージで…」

マサヤ「ほんばれからソーラービーム…」

ハヤト「助けたつて訳だ」

シュウ「オーバーヒートで受け止めRO！…！」

ハヤト、リョウヤ、ブイマル「うるせえ…！」（激怒）

3人は怒鳴ると同時にポケモンを出し、マサヤのトロピウスとシュウのシャンデラに攻撃を加える。

リョウヤ「ほのおのまい…！」

ハヤト「ナイトバースト…！」

ブイマル「ギアソーサー…！」

3人のポケモンであるウルガモス、ゾロアーフ、ギギギアルの技が決まる。

トロピウス「ピウツ！？」

シャンデラ「デラッ！？」

2匹は横からの急な攻撃に反応しきれずに技は直撃、気絶してしまった。

マサヤ「トロピウス！？」「

シユウ「シャンデラ！？」「

2人はそれぞれ自分のポケモンに駆け寄る。

シユウ「なにするん…」

ブイマル「お前らがいつもいつも食事の準備もせず！更には人の話まで邪魔するからだよ！！」（激怒）

リョウヤ「しばらく大人しくしてろ！シユウ！お前はもう立派な18だろ！マサヤ！！弟だからって容赦はしないからな、何かを期待した目で見るな！！！」（激怒）

マサヤ「うひ…」

ブイマルとリョウヤに説教され、反省する2人…

シユウ「乱入するなら相手するからよ…！」

いや、反省したのはマサヤだけであった。

ハヤト「調子のんなよめえ！…！」（激怒）

ハヤトが暴言を放ち、モンスターボールを構える。

ヒカル「ちょっと畠さん、落ち着いて下さい！今はこのポケモンの傷を治療するのが先でしょ！…」「

鍋の火と、ご飯を炊いていた焚き火の火を消してきたヒカルが皆に、本来の目的を思い出させた。

ブイマル「そうだな、だが今はコレしかない。『いい傷薬』  
リョウヤ「無いよりましだろ」

ヒカルに言われ、落ち着いたブイマル達が黒いポケモンに薬を付けようとした時、

シユウ「おいおい！！バトルしないのＫＡＩ！！！」  
ヒカル「行け！ダイノーズ、じゅうりょく！！！」  
シユウ「ぐばつ」

まだ空気を読めていないシユウは、ヒカルの繰り出したダイノーズの重力により、倒れた。

シユウ「おい！一体何が…」

ヒカル「でんじは…！」  
シユウ「アバババ」

後ろでシユウが痺れている間に、ブイマルが黒いポケモンにいい傷薬を使い、ある程度の傷を治す。その後、七人はポケモンをボルに戻した。（シユウのポケモンはヒカルが戻しておいた）

黒いポケモン「う……ん……此処は……」  
ブイマル「おう、目を覚ましたか」  
リョウヤ「此処は120番ど……ん？」  
ハヤト「おい、今こいつ……」  
マサヤ「喋ったな」

ヒカル「えいこ、事ですか？」  
ミスト「…………」

6人あまりの事に絶句する。

…もう皆さんにお分かりであるうが、この黒いポケモンはミナモ沖でテオキシスに敗れた……ダークライである。

シユウ「まあ、相手は人知を越えた伝説のポケモンDA！！！人の言葉を操つてもなんら不思議はないＺＥ！！！」

いつの間にか復活していたシユウの言葉に、6人は更に驚く。

リョウヤ「え…まさか…そんなはず…」  
ハヤト「そりだな…まさか…」

6人「シユウ（さん）（先輩）がまともな事を言つなんて……？」

シユウ「そつちＫＡＩ！……？」

負けじとシユウがつっこむ。

ブイマル「まあ、ダークライに会えたといつのは凄いな。リョウヤ、ハヤト」

ダークライ「何故……俺の事を知つていてる？（ああつもう……早いとこ傷を癒してテオキシスにリベンジしてえんだよ……だからほつといてくれよ……）」

またも心の中で悪態をつくダークライ。

ミスト「……古い文献に記録が残っている……」

ダークライ「……そうか……（あれ）、俺つてそんな人の前に出たつけ？そりや少しは表した事はあるが……それか？）」

ダークライが記憶を辿っていたその時、

ズドオオオン！……！

全員「……!?」

大きな爆発音と共に、大量のエネルギー弾が飛んできた。

ヒカル「何だ……？」

全員が空を見上げると、そこに居たのは…

以前デオキシスが放つた、デオキシス自身の影だった。

ダークライはいつまで素を隠しきれるのだろうか…

リョウヤ「へえ、伝説のポケモン、デオキシスの分身か…ディバイトねえ」

「… ハヤテ、また伝説のポケモン… 流石は分身、数が多いな、せいで…」

ヒカル「全員が全ての手持ちを出したとして……」一四三  
4四倒せば良いですね

「ノイマ川 樂勝たな」

余裕を見せる7人。

「ダークライ」（何い！？あいつらは本体まではないが結構強いぞ！？それを一匹で3、4体？無理にきまつてらあ！！！）待て、あいつらはただのポケモンじゃ…

マサヤ「ないんでしょ 大丈夫 大丈夫」

シユウ「俺達の相手じゃないゾエ！！！」

ミスト「……行くぞ……」

ミストの言葉に、7人はモンスター・ボールを六つ全て構える。

ダークライ「おい、本当にあいつらは……」

ハヤト「心配すんなって。さて、行くか！！！」

ザザンドラ！

ルカリオ！

ゾロアーク！

デスカーン！

ドンカラス！

アブソル！」

リョウヤ「覚悟しろよ、お前ら！！！」

ラグラージ！

ロトム！

ウルガモス！

トゲキッス！

ツボツボ！

ヌケニン！」

ヒカル「その程度なら負けませんよーーー！」

ライチュウ！

エレキブル！

ダイノーズ！

アギルダー！

ムクホーク！

シビルドン！」

マサヤ「ふつ飛ばしてやりますよーーーー

メガニウム！

ジリュウズ

卷之六

トロピウス!

ジュカイン！

キングドラ!

ジュペッタ!

シユウ「ウズウズするNE-!!-やるKA-!!-」

メタグロス！  
シャンテラ！  
リザードン！  
ヒアルド！  
データクン！

ブイマル「俺達をなめんなよ！――ぶつ潰せ――！」

合不！

ギギギノノ

卷之三

グライオシ!

ミロカロス！

ミスト「…………行くぞ…………お前達…………！」

フタモン！  
テツカーン！  
フリー・ジオ！  
ドーブル！

デンチュラ！  
エルレイド！』

7人の…全42匹のポケモンが、一斉に戦いへの雄叫びを挙げる

そして、とうとう出合つた… 7人と一匹。もうひとつの出会いが  
… 運命を更に大きく動かす…

\* おうじとひの由金こ \* (後書き)

後書き

さてさて、これからじばらくはかなり重要な話になりますよ～

レジアイス「どうせ駄文ですけどね」

……（泣）

リョウヤ「てか、然り氣無く俺とマサヤが兄弟つづ設[定]でたな

マサヤ「無理矢理感 満載 ですけどね」

……（大泣）

ハヤト「俺達の手持ちポケモン……だいぶタイプが片寄ってる奴  
がいるぞ」（汗）

だつてリアルの君達がそういうからでしょ。リアルマサヤなんか「草の御三家全部+トロピウス」とか言つてたし、まだ出てないけどある奴は「グラーデンとサンダーとミュウツーと……」とか言い出したし……伝説は駄目つて言つたのに……！

ブイマル「どうでもいいな

断言しなくとも……

7人「それでは読者の皆さん、感想、評価の方、宜しくお願ひし

ます。」（礼）

あ、言つてくれてありがとうございます。

「ヨウヤ、お前にまかせるのも心配だ

.....

\* 最速の閃光\*（前書き）

今日の塾が実力テストで終わつた後休憩と称して書きました！――！

「ウタ「手応えはあつたらしいよ」

それから、今回ぶつ飛び設定が出るかもしません。

「ウタ「もう自分の知人の名前をモジってキャラにしてる君が今更何を言つ、性格も似たような感じにしてるし」（汗）

大丈夫、本人に許可取つてるから（笑）

それでは、本編どうぞ――！

## \* 最速の閃光\*

ヒマワキシティとミナモシティを繋ぐ120番道路、此処で今、大規模なバトル…いや、戦闘が行われていた。

7人は、1人1人で6匹の手持ちに指示していると言つのに、ちゃんとポケモン達に的確な指示を出している。

ここで、ミストがデオキシス・ディバイトの一瞬の隙を付いて6人に目配せし、7人同時に技を繰り出した。

ヒカル「ダイノーズ、じゅうりょく！」

ミスト「ドーブル、ワイドガード、メタモン、ラグラージにへんしん」

ハヤト「ルカリオ！」

リョウヤ「ラグラージ、ツボツボ！」

マサヤ「メガニウム ドリュウズ トロピウス ジュカイン！」

シユウ「ゴウカザル、ドータクン、リザードン、メタグロス！」

ブイマル「グライオン、ヨノワール！」

ミスト「エルレイド、メタモン！」

ヒカル「エレキブル、ダイノーズ！」

全員「じしん！！！」

相手の隙をつき放たれた七人の「コンビネーション、単純なだけに強力な17匹分の地震コンボに耐えられるはずがなく、デオキシス・ディバイトは全滅した。かかる時間は僅か10分程度である。

ダークライ「……（呆気な……て言うか今の人間とそのポケモンってのはそんなに強えのか……？たしかにアイツらは分身だから弱いんだが、あれは早すぎだ……！待てよ、こいつらに手伝つ

て貰えれば……いや、信用できるのか！？だが、今のおまでは……くつ  
俺は、俺は、どうすればいいんだああああああ～～～～～～～～！

ダークライの心の叫びも、まもなく出しちゃうのである。

リョウヤ「弱かつたな、いくら伝説つたってこれじゃあな  
ハヤト「全くだ  
？？？「そうか…では、本物はどうだ…－サイコブースト－－

戦闘が終わり七人が肩の力を抜いた瞬間、突如念の力を込めた光球が落とされた。

ブイマル「ハピナス、まもる！」  
ハピナス「ハッピッ！！」

咄嗟にブイマルがハピナスにまもるを指示し、サイコブーストを防ぐ。

ヒカル「何だ！？」

7人とダークライが再度、空を見上げると

「デオキシス、また会つたな、ダークライ」

デオキシスが浮かんでいた。

ダークライ「…デオキシス…もう本体が…（ちいつ…来るの早えぞ…！）彼奴は分身とは格が違う…幾らディバイトを簡単に倒したからつて人間と普通のポケモンで対抗できるか…くそつ…！！俺の体が動けば…ちっくしょおおおおおお…！」

怪我が完治していない事を恨むダークライ。

リョウヤ「じゅあ…誰があいつと戦うか？」  
シユウ「俺がやりたいゾ！」  
マサヤ「僕がります！」  
ブイマル「俺がやらずには誰がやるんだ！」  
ハヤト「争つてもしょうがないだろ、ここは聞を取つて俺で！」  
シユウ、マサヤ、ブイマル「何故そつなる…？」

「デオキシス、ダークライ」ここにちらほら俺を（あいつを）舐めているのか…！？」（怒） &amp;（汗）

下らない事で争つ4人に対し、同時にデオキシスは怒り、ダークライは焦る。

ヒカル「待つて下さい、皆さん…！」（こは皆で…）

ダークライ「（そうだ… 大体彼奴に一人で挑もうなど無謀すぎる… 万全な状態の俺でさえ互角なのに…）」

慌てたダークライはヒカルの言葉に一度落ち着き、その意見に賛同し…

ヒカル「ジャンケンでもして決めましょーうーーー！」

ダークライ、デオキシス「！－！？？」

ようとしたが、その続きを聞いて愕然とする。

ダークライ「（待て待て待て！－！… 嘘だろーーー？）」

デオキシス「やつぱり俺を舐めてやがる…」（激怒）

2匹の考えなど露知らず、7人はジャンケンを始めてしまった。何回かのあいこその後、勝つたのは…

ヒカル「やつた！」

ブイマル「ちつ…」

ヒカルであった。

ヒカル「じゃあ行きますよ、まずは戻れ！」

ダークライ、デオキシス「え－！－！？？」

敵同士である筈の2匹の声がまたハモる。それもその筈、ヒカルはライチュウ以外の全てのポケモンをボールに戻したのだ。ヒカル以外の6人は全ての手持ちをボールに戻す。

デオキシス「お前…！？」

ヒカル「1対1…これで互角ですね」

デオキシス「ふざけるな!!!!俺をそんな人間の普通のポケモン等と同じにするな……」（激怒）

ヒカル「同じいかどうかは戦えば分かりますよ」  
デオキシス「てめえ……やつてやろうじゃんか、速攻で決めてやる……！」

ヒカルの挑発に乗つたデオキシスはその身をスピードフォルムへと変化さける。

デオキシス「くらえ!!!!しんそく……！」

デオキシスが物凄い速さ…神速と言えるスピードでライチュウに突っ込…

ライチュウ「ライ！」

めなかつた。

デオキシス「な…」

ダークライ「何だと！…？」

ライチュウはデオキシスのしんそくを越える素早さで突撃をかわし、10万ボルトを浴びせる。

デオキシス「ぐばつ…」

ヒカル「今だ！ダークテール！！」

ダークライ、デオキシス「な！…？」

2人は3度、声がシンク口する。何故なら、ヒカルが聞いた事もない技をライチュウに指示したのだ。

ライチュウ「ライチュウ、ライ！！」

闇の様な物を纏つた尾が、デオキシスを襲う。

デオキシス「がは…何なんだ…コイツは…」

こちらは他人事の様に戦いを見物する6人。

リョウヤ「いや～、ヒカルも手を抜かないな。いや、相手が伝説のポケモンだから当然か」

ハヤト「オリ技炸裂ってとこだな」

マサヤ「レベルは デオキシスの方が 上っぽいけど ライチュウも負けてないですね」

ダークライ「オリ技? レベル? ?」

長い人生の中でも聞いた事のない単語の連続でダークライは混乱していた。

ショウ「ダークライはオリ技とレベルの事を知らないのKAI！」

「！」

ダークライ「何なんだ?? それは??？」

ブイマル「それなら俺が教えてやるよ」

ブイマルが得意そうに話す。伝説のポケモンが分からぬ事を自分が知っているので鼻が高くなっている様子。

ブイマル「オリ技ってのはオリジナルの技、要するに自分達で作った自分だけの技だ。今のヒカルのダークテールはふいうちとアンテールの複合技だな。で、レベルはそのまんまポケモンの力量だ。俺達人間にはまだ詳しく分からぬけど、ポケモンのレベルには制限が無いらしく無限にあがると予測されている。ま、その数値も人間の基準だがな。今の確認されている中で最高レベルは今まで開催された全14回、常にWCRの上位にいる3人の切り札、もう上がらないとも言われているレベル……LV336だ。ついでに俺達のポケモンは、万全な時に大体LV220～290位だな」

ダークライ「レベル……ポケモンの力量……WCR????」

ブイマル「簡単に言えば誰が最強の称号……ポケモンマスターなのかを決める大会さ。まあ、最近は殆どさつき言つた3人だけで争つてる状態だがな」

ダークライ「……（いつの間に人間はこんなにも発展したのか……もしかすると……コイツらが信用出来るのなら、或いはそういう手も……）」

さて、ヒカルVSデオキシスの戦いは……

ヒカル「でんこうせつか！」

ライチュウ「ライライ！－！」

ヒカルの優勢だった。

そもそも、アタックフォルムとスピードフォルムで攻めて攻めて、攻撃が来たらディフェンスフォルムになりまくるを使う。そんな單調な戦略が臨機応変に戦うヒカルに通じるはずもなく、

デオキシス「まもる」

ヒカル「フェイント！！」

デオキシスのダメージは蓄積していく一方だつた。

デオキシス「ぐ……俺が……こんなやつに劣勢だと！？……ならば！」

デオキシスはアタックフォルムになると、自分の正面に巨大な念の球を造り出す。それは先程、不意打ちをした一撃と同じ技の様であつたが大きさが格段に大きくなつていた。

ヒカル「へえ、それが君の切り札か……じゃあ僕も切り札、見せ  
ちゃあつか」

ライチュウ「ライ！？」

シユウ「ヒカルが切り札を使つらじいNEーーー！」

ミスト「……ハヤト……」

ハヤト「はいはい、分かつてますよ。行け、デスカーンーーー！」

ハヤトはミストに言われ、ボールからデスカーンを出す。

ハヤト「デスカーン、シャドーベールーーー！」

デスカーン「カーン」

ダークライ「また……知らない技……」

デスカーンは自分の影の様な手の形を平べったく変え、自分とダークライ、ハヤト達を包み込んだ。

ハヤト「ヒカル、ライチュウ、思いつきりやつて良いぞ」

ヒカル「はい！！！行くぞライチュウ！！！」

ライチュウ「ライ！！！」

デオキシス「！！？？」

ヒカル「ギガルクスフラッシュ！！」  
ライチュウ「ラ～イ～ツチュウ～～ウ！～！」

ヒカルが技の名前を叫ぶと共に、ライチュウを中心眩い光が拡がつて行つた。それは技の名の如く、十億ルックスの明るさを持つ閃光が拡だつた。

ダークライ「これは……」

デスカーンの腕の中は真っ暗な空間の筈が、ギガルクスフラッシュが放たれた瞬間一瞬だけ光に包まれた。

リョウヤ「これがヒカルの切り札、ギガルクスフラッシュだ。その名の通り、10億ル×もの明るさの光を相手に浴びせる技。あ、

後「×つて言うのは明るさの単位の事」

ダークライ「それで……どうなるんだ?」

中々意味を理解しないダークライにハヤトが補足を入れる。

ハヤト「太陽の光を地球上から直接見ると約13万「×の光を見る事になる。その約8000倍の光を直接見ると……どうなると思うか?」

ダークライ「眩しいな」

ハヤト「それですむと思うのか?」

ダークライ「?」

ハヤト「人間なら失明の危険も有り、ポケモンでもしばらくは完全に視力を失う」

ダークライ「なつ……」

ハヤト「あて、始まるぞ。ヒカルの苛めが」

ハヤトはテスカーンにシャドーベールを解除させ、ヒカルの戦いの傍観を再開した。



「デオキシス！」……これは……田が……開かない……何も見えない……」

デオキシスはそのあまりの眩さに視力を一時的に失い、サイコブーストを中断した。

ヒカル「チャンスだよ、ライチュウ！－ライジングダークテールラッシュ！－！」

ライチュウ「ライチュウ、ライ！－！」

ライチュウは動きの止まった所を狙い、ダークテールを使ってデオキシスを上に跳ね飛ばし、更にひかりのかべを足場にしてジグザグに尾で打ち上げて行く。

デオキシス「ぐう……」

ヒカル「行けえええ！－！」

ライチュウ「チュウウウ！－！」

ライチュウは止めとも言わんばかりに、縦回転をかけたシャドーテールを地面に向かつてデオキシスに打ち付けた。

それらの攻撃は、全て胸の核に確実に当てており、田の見えないデオキシスは抵抗出来ずに受けている途中で気絶した。

デオキシスは地面に向かい、物凄い勢いで落下していく。

ブイマル「ヒカルの勝ちだな」  
マサヤ「意外と呆気なかつたですね」  
シユウ「これで大丈夫だゾ！――ダークライ！――」  
ダーカライ「す……凄い……（本当になんなんだ……？）コイツらは……！？」  
!?もしかしたら俺より強えんじやねえのか……？更にコイツらより強い人間とポケモンがいる……信用出来るのなら……）」

7人とダーカライが勝利を確信した時、皆の目に突然翠色の龍が飛び込みデオキシスを受け止めた。

\* 最速の閃光 \* (後書き)

後書き

リョウヤ「駄文」

ハヤト「終わり方中途半端」

ブイマル「設定ぶつ飛び過ぎ」

そうかな? ポケモンと言う者は無限の可能性を持っている。だから「も覚えられる技も無限大と言う訳。(この世界では)一応、公式リーグや大会では技の数を制限するルールがある事にしているから。リョウヤとハヤトはスルー

ヒカル「WCRの常に上位って…しかも最近は毎年TOP3を3人で独占、絶対にチート的強さを持つてますよね」

リョウヤ「見る限りチートに近いヒカルより強い俺やブイマル、ミストでも互角、手も足も出ないチャンピオン四天王フロンティアブレーン」

大丈夫、チートは出さない!!!! (ジンダイ基準)

ブイマル「お前の基準が怪しい」

マサヤ「正直 心配 ですね」

だから大丈夫って

7人「絶対大丈夫じゃない（ＺＥ！－！－！）（ですね（ ））」

断言しなくても……

リョウヤ「それにもう少し伝説のポケモンには威厳を持たせろよ、俺達に負けてるようじや黙口だぜ」

そここの所は大丈夫！……伝説のポケモンは強さも個性も物凄いか  
う。

ミスト「…………本当だな？」

勿論！！！

ヒカル「レベルはどのくらいですか？」

それはまた後で。ともかく強いと言つておくよ。

ハヤト「なんだか心配だな」（汗）

だから大丈夫って！

それでは、感想や評価、お待ちしています――！

シユウ「感想の返信も頑張つてするらしいＺＥ！－！－！だから宣し

くＺＡ！－！－！」

\* 戦いを止めたいやうの者達\*（前書き）

今日から三学期とこづ受験に取つてもつとも大切な時期、更に僕は後2週間で本番とこづ（ry

「ウタ「で、結図書いたと」

はい、同じ高校を受けるメンバー3人で学校終了後一緒に。伝書鳩リネロサーチスティ（リアルナオヤ）もいましたよ。

「ウタ「それはどうでもいいから」

はい……すみませんでした！！！ 士下座

「ウタ「あやまちなくてもいいよ、自分が不幸になるだけだから」

.....○.....

「ウタ「では、本編の方お楽しみ下さい」

\* 戦いを止めんとする者達\*

ミスト「これは……」  
ブイマル「……今日は物凄い日だな……3匹もの伝説のポケモンに  
会えるなんて……」

落下していたデオキシスを受け止めたのは……空を回る翼の龍、  
天空の霸者、レックウザだった。

デオキシスは受け止められた時の衝撃で目を覚ます。

デオキシス「うつ……レックウザ？」  
レックウザ「デオキシス……まだ他の奴等と戦う時ではないと言  
つただろ？。なのに何だ、この有り様は」  
デオキシス「……だが、ダークライが……」  
レックウザ「反対派か……あいつらを潰すのはまた後だ。今から  
戻るぞ、全員収集だ。皆はもう来ている」  
デオキシス「全員収集！？」

デオキシスはレックウザの言葉にかなり驚いている。

ハヤト「皆……まだ伝説のポケモンがいるのか……」  
リョウヤ「こんな事が……一体何が起こっているんだ？」

今までの日常とは違う……何かが起こり始めている……7人はそ  
う思い始めていた。

デオキシス「……何があった？」  
レックウザ「イッシュの三竜が……ゼクロム、レシラム、キュレ  
ムが……アルセウス達の方に着いた」

デオキシス「な……」

ブイマル「もう何が何だか分からねえ……」

レックウザが放った言葉に、その場に居た全員が言葉を失つた。

シユウ「また出T A ! ! ! 伝説の、憧れのポケモンがガンガンで  
るY O ! ! ! イエイ ! ! ! 」

……1人を除いて全員が言葉を失つた。

ダークライ「まさか……そんなことが……（何だと！？じゃあ  
あいつらは大丈夫か！？イツシユの仲間が心配だ……何とか無事  
でいてくれえええ！……）」

ダークライは心の中で仲間の身を案じる。

レックウザ「戻るぞ、デオキシス」

デオキシス「ちつ…覚えてろよ！お前ら！…」

デオキシスはじこせいで自分の傷を癒し、レックウザと共に  
飛び差つて行つた。

その場に残された7人と3匹。ヒカルとハヤトはひとまずライチ  
ュウとデスカーンをボールに戻す。

リョウヤ「……何が起こっているのか説明してくれないか、ダー  
クライ」

ダークライ「…………（この）ことは人間に広がると騒ぎになる  
……やはり言つべきではないか……）すまんが、それは言えな……  
？？？「ライ、大丈夫 彼等は信用できそつだよ 「

急にどこからか陽気な声が聞こえてきた。

ダークライ「（まさか！…？」の声は！…？」  
ブイマル「誰だ！？どこにいる！！？」  
？？？「第一人間も関係あるのに話さないのは無責任じやないの  
かな ねえ、君達も何が起つて居るのか知りたいよね ライを助  
けてくれた人間達」  
ミスト「……どこにいる……？」  
？？？「ここだよ」

皆が謎の声がする方を見ると……

ヒカル「僕が作つたスープ？」

ヒカルの作つていたスープの鍋から声がしていた。

？？？「スープじゃなくて中 ほらつ」

声と共に突然、鍋から鋭い角をもつ四足の緑色をしたポケモンが  
飛び出してきた。

ダークライ「ビリジオン……（良かつたあああ……無事だつた  
んだあああああ！……つっしゃあつ……）」

ダークライは仲間の登場に、心の内で歓声を上げる。

ミスト 「…… ビリジオン …… ー？」

マサヤ 「また …… 出ましたね」

ダークライは、鍋から飛び出して来たポケモン…… ビリジオンに  
気になつて仕方がなかつた事を聞いた。

ダークライ 「ビリジオン …… 後の2人は …… 無事なのか？（頼  
む！… どうか無事だと言つてくれ！…）」

ダークライは心の内でビリジオンに祈る。

ビリジオン 「うん、無事だよ 今は反転世界にいるから」

ダークライ 「やうか …… 良かつた …… 本つ当に、良かつたあ  
あああ！… つおつしこい やあああ！…！」

（ガツッポーズ）

ミスト 「……？」

シユウ 「どうしたんだよ？ 意に叫んでーー？」

ビリジオン 「フフフ」

ダークライ 「あ……」（汗）

ダークライの素がとつとい出てしまった。

ダークライ 「あ……こや …… もの …… 違つんだ、今のせ思わず…  
…」

ビリジオン 「本当の自分が出ちゃった、でしょ」

ビリジオンがダークライに詰め寄つて來た。

ダークライ「いやそうではなくつこ……」

ビリジオン「言い訳しなくて良いよ 格好つけなくとも良いじゃん、ライには可愛い所がいっぱいあるんだし 中途半端な熱血で優柔不斷な所とか

ダークライ「俺の話を……」

しかしビコジオンは、一や一やしながら更に詰め寄る。

ビリジオン「君はもう自分で嘘をつかない 正直になればいいじゃない

ダークライ「本当に止めてくれ……」

ビリジオン「ふうん。じゃあ、『あれ』の事を言つていいんだ

ダークライ「何……？」

ビリジオンが『あれ』と言つた途端、ダークライは慌て始めた。

ダークライ「あわわせせせめうびびじロジジオントルトムアレは言わないやや約束じや」

ビリジオン「僕は別に言つて良いくんだよ？」

ダークライ「そそ……んな……」（泣）

ダークライが涙目になつて訴えても、ビコジオンは一や一やするだけだ。

ハヤト「うん……何で言つか……」

リョウヤ「伝説のポケモンってもつと威厳があると思つてたな」「ブイマル」駄目だ……ダークライがどうしてもダメダメな奴にしか見えない……」

ダークライがもつ泣き出しあつになつたその時、

？？？2 「ふざけすぎだぞ、ビリジオン」

？？？3 「全くだ……」

？？？4 「いつもいつも呆れるでござす」

再び声が聞こえて来た……

ヒカル「何故に？」

スープの鍋から。

そしてそこから、ポケモンが3匹飛び出してきた。ミコウツーと  
ビリジオンと同じ様に鋭い角を持つ2匹の蒼と茶色のポケモン……  
コバルトン、テラキオン。

ヒカル「僕は伝説のポケモンが出てくるスープなんて作った覚え  
は無いけど……」（汗）

ビリジオン「あ バルにラキにウツー」

ミコウツー「その呼び方はやめる」（怒）

ダークライ「（ウツー ウツー）」

ミコウツー「…………ダークライ、お前が考へてる事が分かるのは  
氣のせいか？」（怒）

ミコウツーはダークライの考へている事にかんづいた。

ダークライ「氣のせ……「はどうだん」おいつ……！」

ダークライはミコウツーのはじうだんを受け、吹っ飛んだ。

ビリジオン「あらあら」「

コバルオン「お前もだ、ビリジオン」「

ビリジオン「いいじょん バルは厳しいな」「

コバルオン「……………ハア～」

「コバルオンは溜め息をつき、ミスト達に振り返った。

「コバルオン「人間達、コチラのダークライとビリジオンが失礼した」

ハヤト「いえいえ、別に良いですよ。こっちとしては伝説のポケモンを沢山見れたから満足だよ、なあ皆?」

ミスト「……………」「

ハヤト「どうした?」「

ミスト「……………」れは……………夢だ

ハヤト「ミスト……？大丈夫か?」「

ミスト「……………」「

ハヤト「お前らしくないぞ?」「

ミスト「……………」「

しかしミストは珍しくぼくとしたまま、何んでいた。

ハヤト「駄目だこりや……」

ハヤトが後の5人を見ると、

ヒカル「今のスーパー……レシピをどうしたつけ……………」「

ヒカルはスープのレシピを考え、

マサヤ「…………」

マサヤは放心状態に陥り、

リョウヤ「～～～～～」

リョウヤは鼻歌を歌い、

ブイマル「父上と母上は元氣で御座るかな……」

ブイマルは実家の事を思いだしていた。要するに皆おかしくなつてしまつている。

シユウ「ヒコ～！……凄え凄え凄え！……最高の気分だゾエ～！」

ハヤト「何時も通りはシユウだけか…………」（汗）

ゴバルオン「…………（大変そうだな…………）」（汗）

テラキオン「こ、賑やかでごわすな」（汗）

ミコウジー「ま、まともな奴は居ないのか…………」（汗）

当然の如く、初対面であるミコウジー達はこれを何時もの7人だ  
と思ってしまひ。

ビリジオン「ほらほら、ライ 傷口がここにも いっぱいだ  
あ、痴剥かさぶたがしちゃお」  
ダークライ「や、止めてくれ……」（泣）

いつの間にか、ダークライはビリジョンの玩具と化していた。

ハヤトとミュウツー達で何とかミスト達とビリジョンを止め、ハヤトが状況をミュウツー達に説明した。

ハヤト「と言う訳で、ヒカルがデオキシスを撃退したら、レックウザが来てデオキシスに全員収集とかレシラム達がアルセウスについたとか言って俺達が驚いてたら2匹でどつか行つたつう訳だ」

ミュウツー「うむ、説明」苦労

ダークライ「で、今の状況は？」

ビリジョン「だからカツコつけなくていいって」

ダークライ「……良いじゃないか……別に……」（泣）

ダークライはまた泣きだしそうになる。感情の起伏がかなり激しい。

ハヤトは堪り兼ねず、コバルオンにダークライの事を聞いてみた。

ハヤト「すみません、テラキオンさん」

テラキオン「なんでごわすか？」

ハヤト「ダークライさんって……何時もあんな風なんですか？」

（汗）

テラキオン「いや……何時もは眞面目な奴なんでごわすが、時々ああなるんで」わす。なあに、数日すれば戻るでごわすよ……ビリジオングいなければ話でごわすがな」

ハヤト「な、なるほど、そうですか」（汗）

テラキオンの「ごわす」ごわすという偽物の力士の言葉の様な話し方に圧倒されつつあるハヤト。

と、ミコウツーが口を開いた。

ミコウツー「ダークライ、レシラム等がアルセウス側についた事はレックウザから聞いたな？」

ダークライ「あ、嗚呼」

ミコウツー「それについてだが……まだチャンスはある」

ダークライ「なんだと！？本当か！？」

リョウヤ「やべ、全く話について行けね！」

ブイマル「チンパンカンパンだな」

マサヤ「アルセウス側やら 色々と もしかしたら選挙ですかね

」

ミスト「…………マサヤ…………違つと困つや…………」

7人は全く話についてこれていない。……当たり前の事であるが。

ミコウツー「確かにゼクロム、レシラムは自分の意思でアルセウス側についた。だが、キュレムは2人がそうしたからアルセウス側に行つただけの事。……キュレムならまだ考え直してくれるかも知れない」

ダークライ「成る程。……そういう事か。……」

ダークライも納得し、頷いた。さっきまであたふたしてた様子とは大違のだ。

ダークライ「それで、俺はどうすれば良い?」

ミコウツー「そこにいる7人の人間達の力を借りたい。……私達が知つている以上に人間達は発展している様だ」

ダークライ「嗚呼、それは俺も目の当たりにした。……だが、人間達を信用して良いのか?」

ミコウツーは少しだけ空に視線を向け、ダークライに向き直る。

ミコウツー「嗚呼……俺は、信用して良いと思つてゐる」

ダークライ「……変わったな、お前も」

ミコウツー「お前ほどじやないさ、初めてビリジオンに会つた時の事、覚えてるか?」

ダークライ「そ、その話はやめてくれ。……」（汗）

ミコウツー「フッ。……」

ミコウツーは微笑を浮かべると、コバルオント達がいる方を向いた。

〃コウジー「聞いての通りだ。皆は持ち場で……」

ビリジオン「へえ～ 駄はマルか～」「  
ブイマル「どんな呼び名だよーー！」（汗）

テラキオン「だからおこどんはビリジオンの世話役を……」  
ハヤト「あ…はい」（汗）

コバルオン「どうせ私は何の個性も無いからモブで空氣なんだ…

…ブツブツ  
リョウヤ「元氣だして下をこよ」（汗）

シユウ「色々な事が凄すぎだゾー。」

〃コウジーは黙つて後ろを向き、溜め息をついた。

\* 戦いを止めたいする者達\*（後書き）

後書き

リョウヤ「終わり方が超中途半端」

だつて……DSの容量オーバーでこれ以上は文字が入らないから  
描写も幾つか消さないとならなくなつたし……（汗）

テラキオン「おいらんをこんなキャラにした理由は何でこわすか  
？」

色々理由があつて……（汗）

ゴバルオン「私は途中までは良かつたが……最後の一言は？」

いや、気がついたらゴバルオンが空気になつてるなあ、と思つて  
(笑)

ミコウジー「もつとまともな奴を出してくれないか……」

大丈夫、ミュウ側も個性たっぷりだし、アルセウス側に至つては  
うん、平凡な奴がいるかいなかのレベルだねww

ダークライ「この小説は大丈夫か？」

(多分) 大丈夫！……後からちゃんとシリアルに入るから……。

「ウタ「多分ついてるし（汗）で、どのくらいからシリアルに？」

君のバッジが8個たまつてポケモンリーグをやつてから物語はと  
てもなく動きだす（予定）

ナオヤ「要するに未定だな」

すみません（汗）

ギラティナ「オレの出番が無いのが気になるが？」

ヒカル「何故スープから飛び出して来たの？」

それは次回分かる。

ハヤト「伝説のポケモン達の目的は？」

いざれ分かる。

レジアイス「何時になつたら駄文じゃ無くなるのですか？」

それは僕が文章力が上がる様努力す「すみません、一生駄文でし  
たね」そう思うなら聞くなよ……。○→N

メイ「では読者の皆さん、感想や評価の方もお待ちしております  
…どうか次回もお楽しみに…！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9388y/>

---

ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

2012年1月10日21時48分発行